

プリンセス・
アクトレス

11

Miracles!

ミラクルズ

ながたかずひさ

Miracles!

Episode 11

- プリンセス・アクトレス -

2ND

美原 遥之 8P
HANAKO

天満 蘭 8P
RUN DF

堺愛 LOVE 11P
FW

和泉流川 5P
RENPUKI

長居美緒 10P
MIO MF

難波鳴海 7P
NANA MF

1ST

平野 エレーナ 8P
ELENA

吹田千里 8P
CHEETAH GK

西九条 明日葉 12P
LEAF DF

住吉古都 12P
COTTON Manager

天王寺ありす 21P
ALICE

此花可憐 9P
KALLEN FW

守口忍 SHENOBU 1P

マキ 16P
キリカサ MARUKASA 11P
FW

3RD

森之宮胡桃 14P
COO

八尾由美子 16P
YUUME MF

梅田もも 6P
MOMO DF

■あらすじでござる

女子サッカークラブ「ミラクルズ」は、とある街の人気者。高校1年から3年までの一六人+マネージャーが、超色男（ただし自覚なし）コーチに率いられ、楽しく激しく恋に笑いに涙に人生にそしてサッカーに勤しんでおります。

ただいまの目標は、毎年お正月に行われる日本最大のオープン大会「クイーンズカップ」への出場、そして夢はどうか、優勝です！

はてさて今回は、どんな騒動が巻き起こりますことやら。

■目次

- 1 理想のパートナー
- 2 お助けコール
- 3 初対決
- 4 ねこのお願い
- 5 インタビュー
- 6 作戦会議
- 7 改造計画
- 8 出待ちの楽屋
- 9 主演女優
- 10 助演女優

【本日の主演】

- ・堺愛（さかい・あい／プリンセス） F W 11
- 2年生。無口ながら存在感抜群の超絶美少女。実は結構、お茶目。フィジカル自慢のパワーFWだが、出番はあまりない。
- ・三毛寧々子（みけ・ねねこ）
- 2年生。演劇部部长。

【ミラクルズ・メンバー】

〔2年生〕

- ・長居美緒（ながい・みお／みー） M F 10 (C)
- 一見地味だが強く優しく頼もしい、ピッチ内外問わずの大黒柱。パーフェクトボランチ、キャプテン。
- ・難波鳴海（なんば・なるみ／ナナ） M F 7
- ユース代表を張るサツカー小娘。二四時間ギャグ・ドリブル。超絶テクニカル司令塔。
- ・和泉流乃（いずみ・のの／るー） D F 5
- センス抜群切れ味抜群、なんだかんだで頼りになるいい女。光速サイドアタッカー、副将。

・天満蘭（てんま・らん） D F 3

- 天真爛漫豪放磊落、食いしん坊万歳なナチュラルガール。超攻撃的パワフルリベロ。
- ・美原はなこ（みはら・はなこ／はな） D F 2
- 神経質でもうるさくても、学年トップのど根性秀才、作戦参謀兼任。クレバーなスピードDF。

〔3年生〕

- ・梅田もも（うめだ・もも） D F 4 3年
- B三桁のだいまないとばでーを誇るスイーツ魔神。フェアプレー・DFリーダー。
- ・森ノ宮胡桃（もりのみや・くるみ／くー） F W 14
- クールで捉えどころのない、けど特に何も考えてないネコ娘。高々度戦闘爆撃センターFW。
- ・守口忍（もりぐち・しのぶ） G K I
- 時にカジュアル時に武人、麗しき見た目に騙されてはいけない。不屈の守護神。
- ・八尾由美子（やお・ゆみこ／ユミ姉） M F 16
- 頭脳明晰でも気さくな姉御。ガッツと肝っ玉は

天下一品。守備職人、MF・DF。

・マキ・パメラ・キシワダ（まき・ぱめら・きし
わだ／PK）MF 19

ブラジル人日系4世留学生。誰にも止められな
いだんじりサンバ娘。トリッキューウイング。

「1年生」

・此花可憐（このはな・かれん／カレ）FW 9

ド単純でもそこが可愛い、憎めない暴れん坊。
ユース代表の逸材。エース・ストライカー。

・吹田千里（すいた・ちさと／チータ）GK 20

ボーイッシュナンバー元気も一番、いつもチ
ームのムードメーカー。FW兼任の超反応GK。

8 ・平野エレナ（ひらの・えれな／エレ）MF

日露ハーフの元フィギュアスケーター。物腰柔
らか、微笑み一杯。大型MF、中盤の働き蜂。

F 21 ・天王寺ありす（てんのうじ・ありす／あー）M

砂糖菓子少女っぽいが底の知れないキャパを

持つ天才少女。攻撃的MF、ファンタジスタ。

DF 17 ・西九条明日葉（にしくじょう・あすは／はっぱ）

天下無敵のボケ倒せお嬢様。敵も味方も大混乱。
鉄壁のDF、右サイドバック。

・住吉占都（すみよし・こん／はっくん）Manager

ど派手な見た目に似合わず思慮深い、縁の下の
力持ち。心配りのマネージャー。

「男性陣」

・上町大地（うえまち・だいち）2年

超オットコマエ・ミラクルズ・コーチ。
サッカー戦術と乙女心掌握の天才。

・空堀三十六（からぼり・さとる）2年
冴える頭脳に軽い足腰、チームの盛り上げ役。
ミラクルズ・チームプロデューサー、ナナと夫

婦漫才。

・駒川匠（こまがわ・たくみ）2年

プロ顔負けの腕前を持つ写真部のエース。
なんでも撮っちゃう。はなことそこそこいい関

係。

・千林哲哉（せんばやし・てつや）2年

応援団の明日を担う漢気あふれる好男子。

豪放磊落、情に厚い。声がでかい。

・高安和輝（たかやす・かずてる）2年

放送部のしゃべってないとすぐしんじやう星

人。かしましくチームとサポを盛り上げる。

■ I 理想のパートナー

「……はへ？

『理想のパートナー』？」

「そ。どうよそのへん」

「あ、あたしそんなの考えたことないよお」

「？ なに照れてんの」

「い、いややつば兄貴みたいなのって言つといた方がいーのかな、いや、やつぱり『理想』ってからにはコーチみたいなのって言つた方がいーのかなー！」

「あ。

すまんごめんわるい、パートナーってのは、サッカーで。

つまり『理想の組みたいFW』」

「……はへ？」

な、なんでもー……ビクドキすんじゃない」

「こつちがドキドキするよ。」

いやいや、こう、いちばーん後ろから見えますキーパーとしましてはですね、

もう今からでもA代表の9番を背負って当然の日本のエースストライカー・此花可憐ちゃん様にとつてはだ、どんな相棒がいちばくんやりやすいのかな、とこう、興味持ったわけさ」

「……ふむ」

——ここはいつもの、1年生御用達ドーナツ・シヨップ。

吹田千里にそう問われた此花可憐は、好きなオールドファッションの嚙り掛けを片手に、目を真上に向けた。

「あるつしよ、実名挙げるのに差し障りあるなら名選手でもいーよ。こう、ロナウドみたいな決定力だとか、いやシェフチエンコみたいな速いタイプだとか」

「……んく……んなの、考えたことないな……」

「あら」

想定外の答えが返ってきて、千里は転けた。

今日は他の1年生が用事あつて、二人きり。

「だってあたし常にき、こう、試合出れば十分！つて思つてやつてきたから、誰と組むからどうだとか、まして好き嫌いとか、考えたこともなかったね」

「……」

この貪欲さというか、真正直さ、余計なことを考えなさが、コイツの強みだ。

わかつてはいたはずだが、改めてなんのてらいもなくそう言い切る可憐を目の前にして、千里はそう思った。

誰がどう考えてもどんなチームでも可憐はファーストFWであり、むしろ「あたしに合うFWを出せ」と要求してもいいほどなのに……

「……じゃ、さ、胡桃さんと組むことが多いじゃない？ 胡桃さんは、相性いい？」

「ん〜……相性というより、助かる、かなあ」

「助かる？」

「トップつてさ、ディフェンダーとゴツゴツ競るじゃん。あたしあれあんま好きじゃないんだけど、相手が好きだったら受けて立たなきゃならないじゃん？ ところが胡桃先輩居てくれると一番前で全部やってくれるから、もーあれやってくれるだけで助かる」

「ははあ。ま、なんとと言っても元センターだからね。巧いし」

「むしろ好きなんだよね、ゴツゴツが。」

あと高いボールに無理して競る必要がまったく無いとか、あたし得意の左開きやつても真ん中居てくれるから安心できるとか、まとにかく助かるよ」

「なるほどね。マキさんは？」

「あたしとタイプ似てるから、お互いの逆やればいいので、まあやりやすい。ボール扱い巧いからキープもできるし。足速いからカウンターの時も二人、走つてるとやつぱりプレッシャーが全然違うよ」

「MF陣は？ ナナさんに、あります」

「二人ともあたし立っててくれるから、好きだね。MFはやつぱりあたしずつと見ててくれるから気分いいよ。最後にボールくれるしね」

「ふむ、じゃあ……愛さんは」

「……えーつと」

可憐はブラックのアメリカンを、一口飲む。

「……んー……」

「……正直その、特徴、ないよね。

足普通だし、高さ普通だし、巧さ普通だし、パワー普通だし、決定力？みたいなのも普通だし……」

2年生11番、FW堺愛。

FWとしては誰が見ても可憐、胡桃、マキにつぐ四番手で、出番と言えば大抵があまり重要でない場面での途中出場だ。

「……いやでもね、あんなもんだよ？ いやごめん『あんなもん』言うとなんか失礼だ

けど。高校女子のFWでしょ？ あんなぐらいで十分、てかよその高校なら立派なエースだよ」

「……まあ、あんたとか胡桃さんとか見てるからかね」

「うん。いや『うん』言うて偉そうだけど。」

確かに、『これ！』って売りは無いかもしれないけど、あたし的にはやりにくくはないFWかなあ」

「そうなの？ フォローとかじゃなくて？」

「あたしにそーゆー細かい芸ができないの、あんたが一番よく知ってるでしょ？」

「うん」

「うん言うな」

「どのへんがやりにくくないの？」

「あたしがそーゆーの言葉にするの苦手だって、あんたが一番よく知ってるでしょ」

「よー？」

「うん」

「うん言うな」

「といいつつ、可憐、美しい眉を歪めてピッチ以外では滅多に動かない脳を動かしてみる。」

「しいて言うなら……ふお、フォワードらしい」

「フォワードらしい？ なにそれ」

「ななな、なんていうの？ ゴールへの嗅覚？ そんなの」

「また微妙な言葉が出てきたぞ」

「あ！ そう！ 国見キャプテンとね、動きが似てる」

「おう」

国見キャプテンとは、ユース女子代表のエースストライカーにして、自他共に認める高校最強チーム聖愛学園「エンジェルズ」のキャプテン、国見香織のことである。代表でコンビを組む可憐は、自然と彼女を呼ぶ時、「キャプテン」をつけてしまう。

「そりやすごいじゃん。たとえば、どんな風に」

「えーつと……あたしにあんま考えさせないでよお。アタマ壊れちゃうよ」

「ほら、ドーナツ補給するから」

「うーん……もぐもぐもぐ……」

えーつとね、たとえばあたしが左サイドでボール受けるとするじゃん、チャン
スボール」

「うん」

「胡桃さんはね、フリーになれる絶好のポジションを探してそこへ行くの。

でも愛さんはね、シュートの確実性よりもまずDFを押しつけて前へ出る」

「ははあ」

「どっちが正しいってわけじゃないんだけど、そういう感じ、だね」

「よくわかったぞ。あんたにしちゃよーできだ」

頭撫でて「えらいえらい」。可憐の話は、ことサッカーに関してだけは実にわかりやすい。顔をしかめながら受ける可憐。

「……あによエラソーにー。第一ね、なんともなんない選手だったら、コーチが使わないよ。途中からでも出番がある、つてことは、なにかに期待してるの。コーチも」

「そーなのか。あたしてつきり替える方の体力的なものかと思つてた」

「いやだつて、胡桃さんとかあたしよりスタミナあんじゃん。スタミナの面で言えばまず持たないってことはないんで、それで替える必要ない」

「ははあ」

「なんかあるんだよ、コーチの目には、なんか見えてる」

「それが嗅覚、つてヤツなのかなあ」

「わかんないけどね。」

F Wは、なにかがキツカケで大ブレークすることがあるから」

「そつか。じゃあんたもウカウカしてらんないね。」

あのルックスで点も獲れるとなつちゃあ、サポーターの人気独り占めじゃん」

「じょーとーだね。」

コンビ組んでる方の破壊力が増せば増すほど、もう一方もどんどん楽になるんだ。マーク分散するからね」

「おー、頼もすい」

「……それよりちー、なんでとーとつにそんなこと聞くの」

「……他ならぬあんただ。これ内緒だぞ、誰にも」

千里は大げさに店内を見回した。このお店はチームメイトだけじゃなくて、我が校の生徒達もよく来る。どこかから漏れると恥ずかしい。

千里の大きな瞳が可憐のキレイな瞳を真正面から捉える。

……テーブルに、崩れた。

「……試合に、出たいんだよお……」

「ああ」

全部わかった。

吹田千里はセカンドGKである。セカンドGKは一般的に非常に出番が少ない。

ましてファーストGKの守口忍が非常に堅調で調子ブレが少なく現在も絶好調、
武術研究家の父に幼少のみぎりより鍛え抜かれた身のこなしで怪我や疲労とは無
縁、とくればこれはもう……

現在彼女たちが所属するサッカーチーム「ミラクルズ」が勝ち進んでいる、年
に一度の女子最強チーム決定戦「クイーンズカップ」でも、ひよつとしたらこの
まま、ベンチに座ったまま終わってしまうかもしれない。

もちろん、以前テストと実戦勘の養成を兼ねた出場機会はあった。しかしこれ
から勝ち上がれば戦うのは強豪、そんな余裕はどんどん無くなってくる。

で、千里はそのアジリティ（機敏さ）を活かして、一時FWの訓練を積んだこ
ともある。

「それであたしの理想のパートナーになって、FWとして……」

「うう……そお……」

「ばかやろー……」

可憐は食べかけのドーナツを、千里の顔面に押しつけた。
まるで牛の鼻輪のように。

「ふがー！ は、はにすんはー！」

「バカ、FWつてのはさ、『あたしが決める！』つてのじゃなきやダメなの！
なにその二番目前提の考え方！

そんな女にゴールが決められるかあ！！」

「うえーん、だつてー」

「そんなことだから忍様からポジションも奪えないの！！
まずファーストGKを奪うことからはじめろお！」

「奪えるわけないじゃんあんなバケモノみたいな人からあ！」

あの人シュート横から取るんだよ!?

そんなこと一生掛かってもあたしにできるわけな——い！」

「うん、まあ、確かに」

「否定しろー！」

「いや、だから、セービングはともかく、ほら、えーつと、その他でしょーぶするんだよ！」

「なにがあるってんだよゴールキーパーにセービング以外の」

「えーつと……:::勇氣」

「もつと勝てそうに無いよ」

「元気」

「忍様たまに滝に打たれるらしいよ」

「やる気」

「それも」

「そのなに、消極性がよくないの！ あんた脚はサルみたいに速いんだからさ、ギヤーツと前へ飛び出してバーツと取るの！」

「ももんラインひつくいんだよあんた知らないだろうけど場合によっちゃペナエリアに居るんだよあの人スペースなんか無いんだよ」

「じゃ今度『エスポ』でもさんのケーキに毒を入れてはなこ先輩にDFラインに入ってもらおう」

「はなこ先輩怖いんだよ怒ってるんだよ九〇分間ずっとなにに怒ってるかしんないんだけどずーっと怒ってるのミス許してくんないんだよもう全然許してくんない」

「そこはほら、はなこ先輩のミスも怒鳴り散らす」

「あの人ミスらないんだってば。」

「あーもー……」

「おお、よしよし」

今度は可憐が、頭を撫でてやった。

可憐は物心ついた頃にはエースだった。事故でもなければ試合に出る可能性が無い状況がずっと続くなんて、想像すらできない。ただ、「辛かろうなあ」としか。

「……きつとでかい出番くるさ。ちゃんと準備してれば」

「またそんな何の根拠もない慰めを」

「いーや根拠はあたしの野生の勘」

「むー……ホントに？」

「うんホントホント」

言いながら可憐は、だんだん自分の言葉を信じた。

……そう、サッカーは本当に、なにが起きるか、わからない。

試合中にGKが二人壊れて、三人目が緊急出場した国際試合を観たこともある。忍様だつて……嫌な話だから言わないけど……たとえば交通事故にでもあつて、突然試合に出られなくなるこゝろだつてある。

「……シンジラレナ〜イ。

やつぱこつそりFWの秘密特訓を積んで……」

「ああもお！ 愛さんのことフツ〜とか言うけどあんだだつて別に売り物ないじ

やん！」

「へっ!? い、いや……き、機敏さ」

「そんなんだつたらありすと2トップ組む方がよつぽどいーわ。

あんだにあのパス出せる？ あの時空が歪む変態パス。

あんたにあのドリできる？ あの人もボールもくによくによ曲がるこんにやくゼリーみたいなドリブル」

「できるわけないっしょ〜ッ!?

…: あ〜〜〜ん、じゃどおすりやい〜んだよお〜〜」

「だから頑張るの！ 日々の練習を！ それしか、ない！」

「そおなのかな、なにか方法ないのかなああああ」

「無い！」

「あるはずだ〜〜〜」

泣きそうな拗ね顔でヤケになつてドーナツに齧り付く千里を見て、可憐は心の中のため息をついた。

千里は、「運動センス」みたいなものは超一級で、たとえば野球とかバレーボールをやればチームでたぶん一番巧い。だからこそ、コーチ——上町大地——は

サッカーで最も運動能力を必要とされるゴールキーパーに配置している。

しかしその抜群のセンスこそが彼女の不運で、彼女は自分の「あたりまえ」が人にとって驚異であることを、まるつきり理解してない。

あたりまえだから。

だからこんな風に、いつも下手下手から物事を見ている。

『……普通にやったら、いいのに……』

自分より凄いGKがいる。

それは、自分にはどうにもできないことだ。そんなことで悩んでたって、しょうがない。

「いや、やっぱさ、あの優しいコーチがさ、

『千里。GKやってくれ』

つつてんだからさ、キーパーやろうよ」

「全然似てない」

「真似の巧いヘタは今はいーの。」

あれだ、それでぐんぐん成長して忍様を追い抜いたら、コーチ、あんたに惚れちゃうかもよ〜〜」

「……」

ものつすごいジト目で睨まれる。

『そんなことこれっぽっちも本気で思っでないくせに』

「いやホントホント。」

『千里……僕のことを聞いてこんなに頑張ってくれたなんて……』

僕、君のこと、好きになっちゃいそうだよ」

「……」

『あんたはいーよな、別の男いるからな』

「……別に居ないよそんなの」

「なにも言っていないじゃん。」

「どうなのよ最近そっちの方は」

「あー……兄貴そういうのにまるで興味無いんだ」

「ホモ疑惑あるぐらいだからね」

「コーチや空堀先生とわいわい言ってる方がよっぽど楽しいみたい……」

「男の人ってそうらしいよ。いくつになっても男の子同士で遊んでるのが楽しいらしい」

「誰に聞いたのそんなの」

「美緒かあちゃん」

「じゃ信じられる。」

ああ……やっぱあたし妹なのかなあ……」

「落ち込むな。いつか花咲く時もある」

「はあ……」

ま、だからあんたもね、そだ、コーチのハートを奪うことを考えたら、あんた
キーパーのポジションなんてハナクソみたいなもんじゃん」

「ハナクソ言うな。」

……しかしそう言われれば……」

「あんただってコーチだったらOKでしょ？」

「もう宝くじだ。OKどころの騒ぎじゃない」

「んなことに比べればあんたホレ、とりあえず頑張れ」

「んー……そう言われれば……」

世の中もつと難しいことがたくさんあるな！」

「そおだよお。」

自分がウンウン悩んでることなんて、外から見ればハナクソみたいなもんだつて！」

「だからハナクソ言うなつて」

コイツスゲー美人なのにこのへんが少し残念だ。

まあ、だから、気がおけないんだけど、さ。

サポーターとチームの期待と信頼を一身に背負つてゴールへ突進する背番号9。ベンチで喚いてるだけのあたしに比べりゃ、華やかすぎるウルトラヒロインだ。

なのに本人は、全然そんなことを意識しない。

ただボールとゴールしか、見ていない。

『……そうでなきや、ダメなんだな』

ポケーツとした顔に戻って中型のイヌ科の獣、率直に言えばキツネのようにドーナツをはむはむしてる姿を見ると、なんだかバカバカしくなってきた。

「よしオレも食う」

「あ。あんたその『オレ』ってスゴイ似合う」

「やだよこんなの冗談でしか使えないって」

「そういうところから個性つけてくべきだね」

「他人事だと思いやがつて。」

オレは可愛い女の子だぞ。胸だつてあんたよりあんだ」

「あんた胸は不必要にあるよね。あーやはっぱに分けてあげんさいよ」

「不必要言うな。必要になる時もきつと来る」

「夢を持つのはだいじだよ。うん」

「キエエエエエエエエ！」

「ほが」

食べかけのドーナツを、鼻輪に。

「やったなくそー！ ジョイ！」

「へは。」

「……ふぬー……」

「ほまほまほ」

差し向かい鼻輪合戦を見て、珍しく昼シフトで居た店長（熱烈ミラクルサポーター）がため息をついた。

『二人とも大人しくドーナツ食べてれば可愛いのに……
残念だ』

・
・
・

「えくしっ」「くしゅん」

「あら？ 風邪デスか？ 明日葉さん、ありすさん」

「なんか突然ムズムズとー」

「おかしいな」

「寒くなってきたマシたからね」

「ふふ。今日はホットココアにしようかな」

「そーですー。早く行かないとお二人に全部食べられてしまいますー」

「そんなことは……二人だとわからないかなー」

「フフフツ。急ぎましようか」

「うん」

平野エレーナに促されて、天王寺ありす、西九条明日葉、それに住吉古都は歩を早めた。

■ 2 お助けコール

「んでな、『もう間に合えへん』言いながら泣きながら作業してたらな、おかんがだいどこ（台所）から

『さとる、さとる~~~~~!』

って呼ぶねん。切羽詰まった声で。

慌てて行くわけさ、何事や思うやんか」

「うんうん」

「ほなニツタア笑って

『カキむけたで』

柿は今ほええねん柿は！」

「「わはははは」「」

空堀三十六得意のおかんネタで笑うミラクルズ2年生の面々。

教室の放課後、今日はたまの練習なしのオフ。ダラダラダべって時を過ごす。

「お義母さん優しいやんか柿むいてくれはんねんから」

「いやむくなとは言うてない、置いといてくれたらええねんがな」

「でも母としては、むきたてを食べさせてあげたいものよ」

難波鳴海と長居美緒が、三十六ママのフォローをする。

上町大地、ふと気づく。

「そういえば美緒も果物食べさせたがるよね」

「フルーツは大切ですよフルーツは」

「うん、りんごとかはありがたいんだけど、はつきくはむかなくていいよ」

「むかないと食べないじゃない」

「そこまでして食べたいとも思わないし……」

「酸っぱいの身体にいいんだよ？」

「もーなんのプレイしてるのよいつものようにー」

美原はなこが顔をしかめると、普段は「天然」としか言いよりの無い大地が詳細を語る。

「はつきくをね、ふさまで剥いてこう、やって、出すんだよ。」

「そうきたら食べざるを得ないじゃない」

「だってそうしないと本読むのかDVD観るのに夢中で食べないじゃない」

「置いておいてくれたら後で食べるよー」

いつものごとく甘つたるい声で甘つたるい内容の訴えを子どものようにする大地に、油を注ぐ三十六。

「えっ、なにそれひよつとしてこう、もって、それに大ちゃんがかぶりつくわけ？」

「うん」

「TV観てたら口元に次々に？」

「うん」

「プレイすぎる」

全員でその場に溶ける。ナナが吼える。

「よし今度ウチらもそれな！」

「おまえ温州みかんですら俺にむかせるやろ」

「いやん。あれめんどくさいもん」

「えつ、ちよつと待つて、三十六、ナナちゃんにミカンむいてあげるの？」

「……『むいて』言われたらむかざるをえんやろ。お前かてそうやろ、匠」

と聞かれた駒川匠、相方・美原はなここに確認する。

「そんなの言われたことないよ。ねえ、はな」

「言った方がいい？ ん？ 匠が言った方がいいのか？」

「どっちがいいんだろ？ 今度両方やってみる？」

「ん。そうね」

「あんたららしいわ」

「どつちにしても羨ましいよ」

「蘭ねえちゃんにもきつとミカンむいてくれる人が現れるから、きつと」

「あはは、だといいいけどね！」

「じゃあ、私が」

「あはははは。プリンセスにそんなことさせると、学園中の男の子に恨まれちゃうよ」

「そしてプリンセスが学園中の女の子に恨まれる、と」

「ボクそんなに言うほど女の子に人気ないってば」

「けどこうして見るとお似合いかもしれん」

「あはははは」

「ふふふ……」

大口開けて豪快に笑う天満蘭と、その横でシルクのハンカチを口元に当てて微

笑む堺愛。確かに、大柄で野性味のある蘭と、華やかなお姫様ルックの愛の対比は、まるでタカラヅカの主演男役娘役、という風情がある。

「でもみーさ、あんまべちやべちやすると、鬱陶しがられるよ?」

和泉流乃が、いつものシニカルな苦笑いで一応、ツツコミを。美緒、口を尖らせて、

「鬱陶しがって欲しいよ。今空気だもん」

「ふひひ」

もちろんこれを、鬱陶しがるべき大地は聞いている。しかし、こういう話はまったくどこにも届かないらしい。

「……そういえばもうそろそろ学園祭かあ」

「ほうら」

みんなは声を殺して、笑った。

まあ、いつもどおり。だから、安心。

「……あ、いた。空堀く〜くん」

「おい？ あれ、石塚さん、なんぞ」

後ろから声が掛かる。振り返る三十六。

「皆さんお話し中？」

「あ、いや、しょーもない話やから。なんか用？」

「あ、あのね、いま舞台の練習してんだけどね、ミケちゃんがこんななつてて」

石塚さんは、目を三角に歯を剥き出しに指でツノを作る。細面の石塚さんがそうするとまさに般若で、みんなちよつと笑う。さすが演劇部。

「ちよつと来てくんないかな、お願い」

パン！と手を合わせる。

三十六、どんな時でも腰が軽くて人思いのミラクルズ・プランナー、しかし顔をしかめる。

「……いや行ってもええけどさ、いや行きたないとかそんなんじゃないんやけど、

そんなんでいちいち俺呼んでたら話進まんぞ」

「うん、それはわかかってるんだけど」

「俺これから冬は『ミラクルズ』の方にずっぽりやから、ちゅーとはんぱに関わつて迷惑掛けたないしなあ」

「うんうん、でもね」

「三十六、何の話かわからんけど行つたげえな。石塚ちゃん困ってるやん」

「いや、ナナ、あいな」

「ミケちゃん言うこと聞くの空堀君だけだもん」

「んゝゝゝ……」

三十六は顎を擦つて、迷っている。珍しい。

空堀三十六は基本的人好しなので、誰かに頼まれたことを理由もなく断る

男ではない。はなこ、聞いた。

「ミケちゃんつて三毛さんでしょ？ 演劇部の。こんななってるつてどういこうと？」

「ミケちゃんね、盛り上がつてくるとこう、なんていうのかな、乗り移っちゃうのよ。で、練習うまく行かなくなると、カーッと来て怒鳴り散らすのみんなに」

「あらら」

「確かに三毛さん気強そうね」

「学園の『キツめマニア連合組合』が選ぶ、2年生三大キツめ女と言えば美原はなこ・和泉流乃・そして三毛寧々子です」

「えっ？」

「あたし入ってるの？」

「あなたがた」

「それはええけどなにその『ミケちゃん言うこと聞くの空堀君だけだもん』てい

うのそれちよいと聞き捨てならんで」

「いや、それは単に脚本が俺だからであつて」

「あの子三十六ちゃんだけはすつごいリスペクトしてるの。」

あたしの力を引き出してくれるのは空堀君だけだつて」

「石塚さーーん、嘘はよくなーーい」

「ホントだよー」

「ジエ、ジエラるーッ!!」

「いやホンマにホンマに。なんもない、なんも」

「なんやそれで渋ってるフリしとつたんか! そら昔の女がヒス起こしてるとこ

ろへは行きたくないわな! よっしゃわかつたウチも行く!!」

「いやちよつと待て待て」

「ほら、今の奥さんの許可も出たことだし」

「いしーーづかーー!!」

「いぐーーーー!!」

「あはははは……石塚さんに一本、だね」

「三十六、行つてあげた方がいいよ。今年も三十六の脚本なんですよ？」

匠と大地が、笑いながら促した。

「まあね。」

せやけどこれは演劇部の問題やから、演劇部で解決できんと……」

「まあまあ、とにかく今日だけでも！」

「まあ……しゃーないか。ほなこの人連れてつてもええの？」

「来るな言われても行くわー！」

「もちろーん！ 演劇部はいつでも見学大歓迎だよ！」

「せやつたね。」

……ん〜……じゃあ、もう一人ぐらいおった方がええか、第三者」

「あ。そうね、彼女も少しは冷静になるかも」

「僕行こうか？ カメラ持って」

「あかんあかん。変な意識させたらもつとテンション上がってまう。たくみんの他にどなたか。来てくれる人」

……運命なんて、いつどこでどう転がるか、わからない。

私はその時まで、演劇とか、舞台とか、芸能とか、そんなことに、これっぽっちも、興味がなかった。

なぜその時手を挙げようとしたのか、挙げてしまったのか、今となっては、理由なんかわからない。

でもその時私は、挙げた。

見回す三十六の目に、挙げた手が、飛び込んだ。

「……おお、プリンセスならありがたいわ！

いざとなったら舞台立って、ミケちゃんの鼻つ柱叩き折つてくれ。あんたみたいにコチヨコチヨ悩まんでも、生まれ持つて美形だと、舞台立つだけで客が沸くと」

「わあ、堺さん、ぜひ舞台立つてみて！

堺さんだとピンスポに映えるわよきつとくくく！」

「……」

冗談に、頭を振った。

しかしそれはすぐ、冗談では、なくなった。

……あの瞬間、私の全てが、始まった。

■ 3 初対決

——講堂へ向かう。

「……三毛さんは本気なんや。半分真面目に女優目指してるから手を抜いたり、甘い芝居をしたりできへんのや」

「せやかてなんぼ部活や言うても学園祭じゃ……」

「そこに齟齬そごがあるわけさ。お遊びサッカー同好会にお前や可憐こゝろが居るようなもんや」

「ちゃんとした劇団行つた方がええんちゃうか。三毛ちゃんのルックスやつたらなんぼでも欲しがるやろ」

「そういう、ルートに乗つた型にハマつたことはしたないらしい」

「ほへへ。それはそやけど偉そうちゃう？」

「せやけど舞台言うとやっぱりオーバーアクションで分けわからんセリフ怒鳴り散らしてるイメージないか？ ゲージユツ的な。あれは、ちよつと取つつきにくいやろ？」

「あ、ま、確かに。あれはかなり特殊やねえ……」

ほなブロードウェイに殴り込んでレッスン受けえなホンマモノのゝ」

「他人のことなら、んな風に言える。」

お前じゃあ明日アメリカプロ女子サッカーのトライアウト受けに行けるか？」

「んゝ……」

「悪気はないねん。悪気はないしエエモン作りたからそうするの、みんなわかってるから、そうなたら首すくめて時が経つのを待つんやけど……」

「学園祭が近づいて、テンションが天井に張り付いちゃって。」

「ここいらで名ディレクターに冷ましてもらおつかな、と」

「おだててもできるものとできんものがありますー」

「演劇部、先輩とかおらへんの？ 2年が頭？」

「出てった。ミケちゃんが激しすぎて」

「ありやりや」

それは一筋縄ではいかなそうだ。

着いた。重い扉を、開ける。

遠い舞台では、三毛さんが台本を睨んで仁王立ち。表情もまさに仁王のように。その横に、所在なげな他の部員。

「……ねこ〜！ ねこ〜！

また盛り上がりすぎてんのか〜〜？」

『は、はい!?』

三十六は両手をふらふらと頭の上で振って、駆け寄るように舞台に近づく。
ネコで。

「寧々子」で「ねこ」かひよつとして。

「あつ、さと!……る……」

『さとる~~~~~!?』

台本から目上げた彼女の顔が、ぱあつと明るくなりかけて、横の二人の異邦人を認めて、警戒の色に変わった。

てかなんで名前呼びやねん。

「テンションたっかい練習してるっていうから、観客連れてきた。

もつとテンション上げてつてください」

「石ちゃん!？」

「いや、僕が石塚さんにバッタリ会って世間話してたらそういう流れに。

もうそろそろ通して練習できんちゃうん、時期的にー」

「え……いや……」

「あ、また凝りたくって時間掛けてるー。

いつも言うてるやろ、まず、全体の感じ掴まなあかんつて！

ディテール掘り下げるのはそのあとそのあとー。そやないと時間絶対足りんつ

てー」

「だけど一応のレベルつてあるじゃない！

形にもなっていないのに先進めないわよ！」

「それはねこの要求水準が高すぎる・の。」

よしわかった今から見てたるから頭からいこ頭から。幸いここに素人のお客さんも二人いるし！ 知つての通りチームの仲間やから言いたいこと正直に言うてくれる、その評価踏まえて掘り下げるなり先へ行くなりしよよ」

「けど……」

「1年生の人も、全体通して練習した方が楽しいよね？」

怯えるように固まってた下級生達も、顔を見合わせ三毛女王の顔色を伺いながら、うんうんと頷いた。

というより、この状況から脱せるならなんでもいい。

「見せて見せて。ねこの演技」

「……」

『なつ、なんじやそりや~~~~~!!』

なんだそのニツコリ笑顔でおねだり口調。

あんた、あんた、ウチと居る時にそんな、そんな……

むろんそんな風に言われて気分悪い役者がいるはずもない。

ちよつと照れを隠すようにその真っ直ぐな視線を三十六から外して、三毛、口
づもる。

「……そ、それはいいけど……」

い、今、安住ちゃんが居ないから頭つからは無理かな……」

「安住ちゃんが継母役なんや」

「そう」

「誰か代わりにやれる？」

固まるその他の女優俳優。やれないわけではないだろうけど、要は怖い。

いかなあ。萎縮しすぎ。

こんなテストみたいなことまでシンプルにできんようになってるとは。

「んじゃ俺やろか？」

「……あ、いや待て」

ふと、思いついた。

さすがに男の俺よりは、ええやろう。

「……プリンセス、舞台立ってみませんか」

「？」

きよとん、と愛、首を伸ばす。

「えっ、ちよつと」

「ものは要は『シンデレラ』なんです。冒頭の継母がシンデレラを虐めるシーンありますよね。あそこ。一応、台本は……石塚さん、台本」

「あ、はいはい……」

「さとる、堺さん演技とかしたことあるの？」

「なにを言うんですか、堺愛は『ミラクルズ』のパフォーマンズ・ヒロインですよ？」

彼女がピッチで踊れば、千人二千人の観客が沸きに沸くんです」

「あ……」

『モノは言いようやなー……』

確かにそれは嘘ではない。

愛はそのルックスもあり、多少強引なプレースタイルもあり、また戦局が動く途中投入で盛り上がってる時にプレーすることもあり、サポーターの気持はすこぶる高い。

大フカシ・シュートでさえ、沸きに沸く。

「はい脚本！」

「センキュ。……ここ、頭から。見て、お馴染みの感じですよ」

覗き込む愛。うんうん、うなずいてページをめくる。

やる気だ。愛ちゃんは意外に、いつもノリはいい。

「あ、もちろん台本持つて見ながらやつてもええよ。いや、むしろテキストにアドリブでぶちかましてくれ。冒頭、いわゆるツカミなんで、お客さんビックリするようなんがええねん。わけわからんでも、『これから何が起こるんやろう!』つてな感じの」

「……」

こくり。うなずいた。

「やっころー」

「ほな、ウチはシンデレラやつたらええん？」

「えつ、ちよつ」

「シンデレラは本職がおやりになりますので。あなたはのちほどカボチャの馬車の役などを」

「わつはつは、ウチにピッタリやね！」

走るよおどこまでも！ 緑黄色野菜パワーでね！

……きいやいやいや……」

「いででで、いで、いででで……」

「あははははは……」

ナナがノリツッコミで三十六の頬をひねり上げると、場が少し、なごんだ。
ありがたい。

……でもちよつと痛すぎへんか？ いつもより。

「……じゃあ、愛ちゃん、おねがいます」

「はい。」

ぽん、と台本を置いて、愛が椅子を立つ。

「台本、いいの？」

「最初の場面は、覚えました」

「おっ」

いかによく知られたシーンと言っても、割と台詞数はある。

すつ、と立って舞台袖の小さな階段を上がる。

なんとなく、もう存在感があるような気がするの、気のせいかな。

「……しようがないわね……」

じゃあみんな！ それでいきます！ 第一幕第一場！」

「はいっ!!」

「キュー振りまゝす。

……準備いいですかー」

「……OK」

寧々子が床に這いつくばった。

床の拭き掃除をするシンデレラである。

「よおい……」

スターーッ!!」

手を動かかしはじめる。一拍。たぶん本番ではピンスポットで、モノローグ。

「ああ……手が冷たい。

でも、早くお掃除を終わらせなきゃ。

今晚はお城で舞踏会。

お母様やお姉様のお洋服の準備をしなきゃ……」

立ち上がる。

「でも……私も行きたいな……」

ううん、踊りたいなんて贅沢は言いません。

とても美しくっていらつしやるという王子様のお顔を、一目、見てみたいの…

…」

さつきまでの「2年生三大キツめ女」の実力を遺憾なく発揮していた表情・空気はどこへやら。そこにいるのは完全に、か弱き乙女シンデレラ。

男性ならちよつと守りたくなるような、そんなけなげな表情。

『……エエ感じやんごつつ。こんな巧いと思てへんかった』

『巧いのは巧いんやつて。なんでもできる』

「……いけない。

見果てぬ夢を見てはいけないわ。

今は、しっかり、お掃除を」

「お母様！ 私も王子様のお目に止まりとうございますー！」

「ええええハナエあなたの開いた目の間の空間に王子様の視線は釘付けよ!!」

『ぶっ……ぶほっ……よ、容姿ネタはアカンって！ ぶひっ』

『ぶっ……ち、ちが、俺書いてない、書いてなプツ』

「いえ待って私の娘にしてはイマイチな二人。

私……そう、私が王子様に見初められてもいいのよね!!

なんといつても恋に年齢は関係ないもの!!

ううん……王子様意外に年上好きかも!!

そう、私が……私が明日のクイーンになるのよおっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほっほ!!

「……」

もう娘二人、継母の暴走にどうしていいものやら。

「そうと決まれば早速仕度だわ!!」

……あああああああつ!!」

ガラガラガラガラガラッシャ〜ン!!

シンデレラのバケツに引つかかる。ど派手な音を立ててバケツがすつ飛ぶ。本人も舞台端から端まで飛ぶように転げ回る。ピッチでファウルを受けたFWのよ
うに。

起き上がる。

「……こんなところにどうしてバケツが置いてあるの!?

わかった……あの女の仕業ね……世界でたった一人私の幸せを望まない女……

世界・一・みに・くく・て、

世界・一・イヤ・ラシ・い性格の、

実に貧相で実に惨めな、貧乏神と疫病神を足してそのままのような女……

その忌まわしき名はああ口に出すのも穢らわしい、

シンデレラ!!!」

そこまで言わいでも。

「……」

「シン・デレ・ラ~~~~~!!」

「……はっ、はい!!」

呆然としてた寧々子が我に、いやシンデレラに返った。負けてはいられない。

「あなたなにをボオツと油を売っているの!!
私の、私達のお洋服の仕度は済んだの!？」

「あの、お時間が、ま」

「口答えをするでないよおおツ!!」

ぶおんっ!!

パーーーーーーーン!!

……と、平手打ちの響きを幻聴しちゃうかのような、オーバーながらナチュラ
ルアクション。もちろん空振り。一瞬遅れて、

「……あ、ああっ!!」

寧々子が倒れた。

「……ストーーーーーッップ!

ストオオオッップ、ストオオオッップ!!

あはは」

三十六笑いながら、さすがに止めた。両手を振る。

「あかん。あかんあかんあかん。あはは」

「……だめ?」

「あ、いや、継母の演技じゃないよ。ポリウムが合っていないだけ」

「ちよつ、ちよつと待つて、不意突かれた！ 次は思いつきりテンション上げてく」

「いや」

にやつ、と三十六笑う。

ナナ、横で見えて、「あれつ、こんな顔すんねやこの人」と思った。少なくとも

もウチは、見たことない表情^{かお}。

親指と人差し指をくるつ、と半回転させて、

「替えよか」

「待つて、もう一回!!」

「ずっと替えるわけやない。愛デレラが見たいねん」

「!」

『ひゃくくく、ヤらしいくくく』

さっきのように寧々子継母が見たい、とは言わなかった。

煽ってる。

煽りというものは、そうとわかってても、煽りの役を果たす。

「……あかった。さっきみたいなテンションのがさとするの好み？」

「シンデレラ、台本」

「だいじょうぶ」

「さっきの時間で全部覚えたん？ スゴいなあ!!」

「すこしだから」

「……」

『えげつなくくくく！ ガン無視かい』

「OKそいじや早速行きましょう。」

あ、容姿ネタは無しな。

牧瀬さん小林さん二人ともメツチャ可愛いから。さつきのは誇張やであくまで

も」

「ごめんなさい」

「あつ、いえいえぜんぜん！」

「私ヒラメなの自覚してるよ〜」

「「あはははは……」」

「……」

存在感をどんどん削られて、寧々子の顔が真っ白になっていく。

さあ、ここからが。

『見物や。』

こーゆーことは、しょっちゅーあることやで、ヒロイン』

ここで崩れるようなら、所詮、お遊びである。

ナナは寧々子の肩を持つ。

小学生の頃、初めて清水リカという女と出会った瞬間のことを、思い出した。
なにもかもが自分より遙か上の天才に。

でも今は、出会ったこととヤツが居てくれることほど、感謝すべきことはない。

アイツというベンチマークがある以上ウチは、どんなチームに居てもどんなポジションにも居ても、成長を続けられる。巧くなつていける。

長居美緒が急激に追い上げても天王寺ありすが彗星のように現れても、心乱すことはない。

一点見つめて、走ればいいだけ。

『こんなところで負けてるようでは、これから先どうにもなりません。あなたの年でもうバリバリやつてる子かつて、あの世界はたんとおんねんから』

ちよいとばかりあちらの世界に足を掛けてるナナは、そうも思った。

三毛ちゃんには、もうひと味、足りない。

無理に言葉にすれば、「思い切り」か。

あの程度可愛い子ならごまんと居る。あの程度小器用な子ならごまんと居る。

しかしそれでは、人目は引かない。

……つて、まさか。

ナナ、三十六の横顔をそつと観た。

そこには、さつきまでのいつもの人を挑発するような表情はなく、本当に真剣に舞台を見つめる、大好きな彼氏の姿。

『……かーっ……』

ナナも視線を、舞台に戻した。

『……男の子つていうのは、いつでも男の子なんやねえ』

ちよつと惚れそう。

いや、もう、惚れてんやけど。

「……準備OK？」

さつき寧々子がやったように床に手をつく愛がうなづく。

「第一幕第一場、よおい……」

スターーーッ！」

ザツ・ザツ・ザツ、ザツ・ザツ・ザツ……

床を擦る布の音が聞こえてそうな、極めて自然な芝居。

その架空の雑巾をバケツの中でゆすいで、絞る。

ぽたぽたという水の音も、聞こえてくる。

ぱん、ぱんと伸ばして四つ折りにして、バケツのへりにかけて、背筋を伸ばす。
手首で額の汗を拭って、一休み。

「ふう~~~~~つ……」

なんとナチュラルなんだろう。

どう見ても床掃除にしか、見えない。

「……はー……つ……」

つめたい」

両手を合わせて息を掛けた。白い吐息が、見えてくる。
すつ……と立ち上がる。

「……今日はお城で舞踏会……」

……。

……いつか、そこで王子様と踊ることができたなら……」

それだけ呟くと、かぶりを振った。夢を追い出すように。

そしてまたバケツに掛けた雑巾を手にして、床を拭く。

小さく、自然な芝居。華やかな顔かたちだけに余計に注目して集中してしまう。
たったそれだけで、観客は彼女を「シンデレラ」だと認めざるを得なかった。

誰もが知る物語である。ここから何が起きるか、みんな知っている。それを思い
起こさせるような、含みのある懐の深い演技。

「……シンデレラー！ シンデレラー！！」

「あつ、はい、お義母様」

「まあ呆れた。あなたまだ床掃除が終わってないの？

本当にウスノロなんだから……」

「はい、すみません」

対照的に入りは静かに来た。

しかし震えるような強い声で、一気に緊張感が高まる。

「それから何度言ったら覚えるの。私のことは『奥方様』とおっしゃいと言っているでしょう？」

「はい、……奥方様」

「フン。イヌより物覚えが悪いのね。」

それはいいわ。お掃除はあとでいいから、私達のお洋服の仕度をして。今すぐよ」

「はい。でも、今からお召しになりますと」

「……なに、口答えしようっていうの？」

「……いいえ。すぐに仕度して参ります」

「本当にアレは気が効かないわ……」

もつとちゃんとしたメイドを雇いたいところだけど、お金がもつたいないのよね。

それもこれもあの亭主の稼ぎが悪いからだわ。

……ヨシエ！ ハナエ!!」

「「はいお母様」」

「今宵の舞踏会は真剣勝負よ。」

いい？ 王子様の目に止まってお近づきにでもなれようものなら、お妃様への道も拓けるといふものだわ!!」

「はい!!」

「そうなれば……ふふふ。二人とも。贅沢のし放題よ。

好きなお洋服を好きなだけ買って、好きな靴も好きなだけ買って、そして……フッフ、好きな男を、好きなだけ漁ることもできるわ……」

『……これええやん。ウチこつちのが好き』

『なんか人間って、出てまうよなあ』

幾分コミカルだった愛の継母と違い、こちらは典型的な悪女だ。醜悪というよりは妖艶。人をバカにするのではなく、人を食い物にする。

どっかり椅子に腰掛けると、高く足を組み肘置きに腕を預ける。

「けれどもお母様？　王子様はとても美しい方だと聞きますけど？」

「王子様と結婚できたら、それでいいなあ」

「フフフ……だから貴女たちは小娘だと言うのです。」

「フツ……どんな男も中身はつまらないものだわ。それは王子様でも同じ。そして男の顔なんてね、三日で飽きるものなの。どんどん取り替えばいいのよ。すこしぐらい浮気でもする余裕を見せた方が、気になって追いかけてくるものよ」

「はあ〜」

「もつとも、私も王子様には興味があるわ……」

「なんといつても遠い外国からもお興入れのお話が絶えぬ方。なかなかの美男子なのでしょう……ヨシエ、ハナエ、貴女たちには悪いけど……」

「王妃様の座、私が持つていつても、よろしいかしら」

ぺろり、と舌なめずりをする。

幾分吊り目気味の寧々子の瞳が、キラリと光る。

立ち上がる。

観客席目掛け、両手で小さく、弓を引くゼスチャー。放つ。

「王子様のお心……射止めてみせましょ？」

自己陶醉の表情が、いい。こつちまでゾクゾクする。

彼女は自分の魅力を、よく知っている。

一呼吸、ためて、愛、再登場。

「……奥方様、お洋服をお持ちいたしました」

「フン、いちいち遅いわね……」

どれどれ……

……あなた、いつまでそこにいるの？」

「あの、お手伝いを……」

「靴を用意しなさい靴を!! 時間が無いんだから！」

「はい……」

「……待って、シンデレラ」

「はい」

「実はね、貴女にも舞踏会に行ってもらおうかと思って、お洋服を用意しておいたの」

「えっ！」

「「お母様!」」

「フフ……私達の引き立て役も必要でしょう？」

だからそのお洋服が欲しかったら取ってらっしゃい。

それはね……

イヌのポン吉のベッドになっっているわ!!

ホーーーーーッホッホッホッホッホ、

ホーーーーーッホッホッホッホ!

「イヌの寝床ですって? 貴女にふさわしいわシンデレラ!」

「毛だらけのボロ布でせいぜい舞踏会にいらつしゃい。皆さんに注目してもらえ
るわよ」

「「ホーーーーーッホッホッホッホ!!」」

三人退場。

『……ああ、女は、こわい』

『あれどこまで脚本なん』

『ゼロ!』

『……オオコワ』

まだある。

舞台上に一人取り残された愛デレラ、客席上空を見つめいかにも儂げな表情で、己の運命に耐える。耐える。

「……舞踏会……」

……。

……王子、様……」

……はらり。

瞳から確かに、光が落ちた。

『泣けるんか!』

三十六が驚く。さらに驚く。

……ごしごし。

愛デレラは、手でもブラウスの袖でもなく、架空のエプロンの裾で、その涙を、拭った。

ぴたり。止まって、

「カアアアアアアアアアット!

ブリアボオオオオオオオオオオ!です!!」

愛ちゃんが顔を上げる。三十六、指で作ったOKサインを、手が震える程突き出した。愛もにっこり笑う。

寧々子と二人娘も出てくる。寧々子は心なしか、肩で息をしている。

「ねこ、最高やったで！ よし今から脚本書き換えよ！ 寧々子継母主人公にして題して『継母の野望』！」

「……バ、バカ言わないで。ひとの役だからこんな無茶苦茶もできるんだから」「いやあシンデレラん時よりずっとノビノビ演ってたで？ ねえ皆さん、最高でしたよねえ、三毛さん」

舞台袖で控えてた下級生達が、うんうん頷く。

「だから！」

「……みんなに、こうして見せたげたらええんちゃうん？ お前さんが引つ張つていかなあかんやろ、演劇部は」

「……」

「口で説明してもわからへんつて。身体、というか全身でやるもんやねんから、お芝居は。やって見せたげたら、すぐわかるつて」

「や、やってないわけじゃないわよ」

「それっぽい『カタチ』ばかりやってたんちゃうか。参考になるのはそんなもんやのうて、真剣勝負やで」

「……」

凶星を突かれて、寧々子、何も言えない。

「……愛ちゃんどうでした寧々子継母は」

「怖かったです」

「あはははは」

即答に、若い子達が笑った。

でもそれは、芝居では誉め言葉。

「さすがだと思いました。迫力がぜんぜん違います」

ぱちぱちと、小さく手を叩く。寧々子も苦笑い。

「……そりゃ、こんなのはっかかりやつてるからね」

「心配して見に来て損した。この調子でやってきや、全然大丈夫みたいやね。ほ

な鳴海師匠、お邪魔な我々は帰りましょか」

「えっ!? もう帰るの!? まだ最初の最初……」

「んにゃんにゃ。いつまでも居たら邪魔やから」

「せやね。失礼やけどこんな本格的やとは思ってへんかったわ。本番、楽しみにしてるよ〜〜」

「ふっ……ありがとう」

とんとん、と舞台袖階段を降りる愛にも。

「……堺さん」

「？」

「……ありがとう」

「……」

ニツコリ笑つて、小さく頭を振つた。

なんでもない、という風に。

三人が引き上げる。

扉の手前で、舞台から大きな声が届く。

「……さとり！」

「……また来てね!!」

「……」

三十六それには答えず手を挙げて振つて、重い扉を、開けた。

ギイ——ボタン。

「……チヨワアラアアアアアアアア!!」

「うわあ」

ナナのハード・シヨルダータッコーに大きくよろめく三十六。

「なんやねんこの男前女たらしドスケベ——————エエエエエ!!」

「ちよ待て待て、な、なにを言うんや」

「なんじゃありやなに?え?なに?」

『ねこー ねこー』

「あんたペットシヨップの前で子猫見て喜ぶ5歳児か!」

「ちが、あれは立場的にこの人と同格ですよというポジシヨントークでやな」

「ほなやつたらあんな甘つたるい声出さんでええやんかウチに対してあんな声せえへんやろいつもー！ー！」

「いやしてるしてる、絶対してる」

「なにあの氣い遣い倒したやつさしい態度。なあ愛ちゃん!!」

「すつごい、オットコマエ」

「こらあ愛吉」

「なにもう完全に二人の空間ができあがってたやんか！ なに最後

『また来てね!』

ここはオカマバーやないんですからね!?

それもなにカッコつけて手だけ挙げて。

『もう来ません』

つてハッキリ言え!!」

「いやたとえ実際には来なくても来るかもという安心感があるよね、」

「それが安心感になつてゐるつちゅーのがヤラシイやないのもー……

あああああ旦那の昔の女の話なんか聞くもんじゃないわー！ー！！」

「だから、ちがう、言うてるやん！」

「あんたが違つても向こうはべつたべつた惚れやんか！ なにあのトンガつたギラギラの目があんた見てるときだけうるうるすんのなにあれホンマ女優は怖い、女優は、怖いわくくく！！」

「違つて、ねこは芝居しか興味ないんやから」

「その『ねこ』言うのやめえつちゅーてんねやー！！」

「いやホンマに。なに、ディレクターと役者やから。そういう、役職上のね、

あ！ そや、そうそう、ミラクルズにおける、大ちゃんみたいなもんですよ。君らだつてあれでしょ？ 大ちゃんには絶大な信頼寄せてキラキラした目で見とるやないですか。あれですよあれ。ただあれだというだけで」

「よけ悪い。」

ウチは違うけど、あのみんなのキラキラには信頼だけではない何かがつぶり混じっております。ウチは違うけど」

「……うむ。まあ、そう、かも、しれんが。」

大女優・愛先生はいかがですか？」

「？」

「……んー……どうでしょう？」

「あら。否定はしないのね。」

ええなあ大ちゃんは。シンデレラにさえモテモテで」

「ふふふ……でも、楽しかった」

「ああ！ 愛ちゃん、シンデレラも継母も最高やったで。これお世辞やなしに」

「せやな。これハッキリ言うとかくけど、愛ちゃん才能あるよ。芝居、やれると思う」

「………そう？」

「うん。俺もたくさん舞台立つ人見てきたけど……

君には天性がある。

そもそも芝居つてのは自分を空にしないと役が入ってこない。

これができる人がまあだいたい二〇人に一人」

「そんなもんなん!？」

「うん。今の演劇部だとぶっちゃけねこだけ」

「だからねこ言うな」

「あとはパターンマッチで『こんなパターンだな』っていうのをトレースしてるだけなのさ。今は生まれたときからドラマにアニメに映画、始終触れてるからね芝居に」

「なるほどね、なるほどね、なんとなくわかる」

「さらに、入ってきててもその人の表現力には幅がある。

名脇役・性格俳優の人なんかで、どれ出てもおんなじ個性の人おるやろ？

それはそれでええんやけど、それだけだとそういう役しかできない。
愛ちゃんには幅がある。

シンデレラと継母という真逆の役を見事にこなした。

ねこの正統派の継母ももちろんよかったけど、愛ちゃんのコミカルな継母の方が、俺的には好み」

「ねこ言うな。」

ああ、あっちの方があんた好みっぽいね。

って、愛坊まさかそういうの考えてああいう役作りしたん？」

「……ううん。」

でも、脚本が全体的にコミカルだったから」

「ははあ。やるなあ」

「本、あの時間に読めた？」

「ううん。パラ、パラ。」

けど、普段の三十六君も考えると、そうだから」

「三十六君言うな。空堀君で」

「いやいや、むしろ『さとる』と呼ば捨てていただきたい」

「じゃ……さ・と・る」

「くらくらくら」

「はい！ 愛先生！」

「私のことも、『あい』って呼んで」

「はい！ あ、い……ちゃん？」

「うん……よ・び・す・て」

「あ」

「やめんか——————！！」

「じょーだんや」 「です」

ふふふふふ、と首をすくめて愛が笑う。いつもより饒舌で、声も大きい。なにより表情がすごく自然で、華がある。

「……もお、愛吉に本気になられたらこんなベースケ男すぐ持つて行かれてしまいますから。ホンマ勘弁して。あ、大ちゃんやるから。アレ持つてけアレ」

「自分のものでもないものを。そんなこと言うていいんですか。最終防衛絶対要塞がグオングオン音立てて飛んで来ますよ」

「それと戦うのは、ウチやないから」

「両方友達やろ」

「両方友達やからこそ！ それぞれに、幸せを掴んで頂きたい」

「無茶苦茶やな……」

まあとにかく愛ちゃんその力は悪用しちゃいかんぞ。ホンマな、君は自覚ないかもしれないけど、君はウインク一つで相手の男の人生を変える力を持つとるん

「や」

「人生？」

「ああそうとも。そんなものされてみい、『ああ、あのプリンセスが、ひよつと
して僕に気があるのでは』と勘違いしてそのまま婚期を逃す」

「さとり？」

「ん？」

……ぱちん。

「……のがす……!!」

「逃すな……!!」

「じょーだんや」「です」

「ああ油断と隙がない、ああ油断と隙がない」

「ふふふ……」

「しかしあれやな。愛ちゃんは憑依系やね。完全に乗り移ってた」

「そやなあ。シンデレラと継母としか思えへんかった」

「ねこは作り込み系というか、自分をその役へ持っていく感じ。対比が非常に面白かった」

「だからねこ言うなと……ん、まあ、迫力というか、生臭さはあつちのがある。ウチあつちの演技も好き。人間臭くて」

「おまえさんはそうやね、いつもね」

「うん」

「……人間くささ、か……」

「おつ、愛先生なんですか、そつちもやつちやおうという気ですか!」

「それは愛ちゃんから一番遠いところのような気がするけど……ま、やってみるのもおもしろいかも!」

「……」

今日の愛は、くるくると表情がよく動く。

いや、普段から無口でおとなしいが、中身は結構お茶目で、冗談も好き。だといふのは、みんな知ってたけど、今日はそれを、よく表現もしていた。

そしてそうすると、天性の美貌が何割増しにも輝く。

ナナでさえ、思わず見とれそうになる。

さつき言ってた冗談が全然冗談にならない気がして……ヤバイ。

「……しかし、美人は得やなあ。立ってるだけで、視線を奪ってしまうもんなあ」

「それも才能さ。足が速い、高く跳べる、身体が大きい、のと同じ」

「やっぱ人間、持つて生まれたもんかねえ」

「いや、それは違うね。」

それはお前が一番よく知ってるやろ」

言下に否定した。

そう、ウチは、小学生の頃から、煌めく才能を持ちながら、消えていった何人ものプレイヤーを知っている。ウチや可憐、あるいはリカや国見キャプテンが、「代表でござい」なんて偉そうに言えるのは、ただただ「ずっとやってこれたから」に過ぎないのではないか、とさえ思うことがある。

環境がそれを許す幸運と、その運にすがり続ける意志。

ただそれだけではないかと。

技術とか、才能とか、そんなことではなくて。

「……せやから俺はねこにも頑張ってもらいたいのさ。たとえば愛ちゃんが明日スカウトされて次の大河ドラマやります言うても誰の手柄でもないけど、ねこが将来女優として羽ばたけば……それは本人の努力の成果、そして演劇部や、ウチの学校のお手柄でもあるやろ？」

「まここで『俺の』と言わないところがあんだのエエトコや」

「悪いところもある」

「ウチはそこが好き」

「おまえさんはね」

羨ましいなあ、と愛は思った。

二人の間には強いツナガリがあつて、それは恋とか、そういうのを超えてる気がした。

私にも欲しい、とも。

その場合、もちろん、さとりる君でもいいんだけど……

「……でもさすが友達っていうか、あんた大ちゃんと同じやね。

あの人も全員を持ち上げようとするから。スゴイと思ういつも」

「基本的にあいつは人間が好きなんだ。あと教え魔だから、教えて伸びていくのが楽しいんじゃないの？」

「……出来の悪い、生徒」

「いやいや」

自分を指さして言う愛に、二人は声を揃えた。

「愛ちゃん迫力と根性あるから、サポ沸くよ。途中出場はやっぱり『おっ、すごい』

いの出てきたぞ!？」という期待させてくれるのが一番やね」

「これ正味の話でオフエンス・コンダクターとして言わしてもらいますけど、愛ちゃんは決して悪くないです。みんな可憐のワープとか、くるみんの東京タワーとか見てるから、特徴無いように思ってるかもしれないけど、ウチからすりゃあ十分以上のFWですよ、うん」

「……ほんとに？」

「マジでマジで。友達相手におべんちゃらは使いませんで。

なんていうの、やりがい、あんねんで」

「やりがい、つてなんや？」

「んー、説明難しいんやけど、クロス入れるやろ、ほな、撃つてくれと。外しても空振りでもええねん、撃つてくれと。

くるみんはねー、それでもクールにスラしたりパスったりしてくるから、まあチーム的にはその方がええんかもしれんけど、それでDFに取られたりすると

『あー』てなるねやつぱり。愛吉にはそれはない」

「なーるほどね」

「……頭に、血が上ってる、だけだと思う」

「いやいや、そんでええねんて。FWなんて。『落ち着いて決めましたね』なんてのはウチらMFにまかせといたらええ。FWはアドレナリン噴き出して戦ってくれ。」

「そそ、さっきの継母みたいに」

「ああ、そやなあ。あのバケツ蹴つ飛ばして転がるところ最高やったなあ」

「あれをピッチでやらな、あれを」

ぽんぽん、と裏拳で愛のお腹を叩くナナ。

愛は苦笑い。

「……そんな風になったら……試合、出られるかな」

「それは大ちゃんに聞かんとわからんけど。」

までもあの人基本的に2トップ好む人やから、四人で二枠争うねんから確率1

／2や！ 簡単なもんやろ？」

「ははは。確かに。シンデレラやったら、一枠しかないからな」

「……さとする」

「ん？」

「だからさとする言うなと」

歩を止めて、愛が聞いた。

「……どつちがよかった？」

「……」

目が真剣。2秒考えて、正直に答える。

「シンデレラなら文句なくあなた。継母は、俺は愛ちゃんのが好きやけど、芝居としてトータルで考えるとねこ」

「……。」

……その時、役者はどうすればいいの」

「相手に聞けばいい。いい監督、ディレクター、プロデューサーなら、その役者の力を引き出すように持つていくはず。導いてくれるはず」

「……。」

わかりました。ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

「あかんでー！ チーム辞めて演劇部行くとか言い出したらー！ー！」

「ふふふ」

笑いながら、ぶんぶん首を振った。

そういう、意味じゃない。

「使ってもらう」には、どうすればいいのか。

それを「監督」に、教えてもらっただけ。

今までそんなこと、考えたこともなかった。

可憐ちゃんは凄い、胡桃さんは凄い、マキさんも凄い、私はコーチに言われた動きと練習を、やるだけ。

自分の力を、使ってもらえるなんて、思ったことも、無かった。使われた時は、コーチになにか都合があるんだと、思っていた。

……違う。

私の力を必要とする時も、きつとある。

そう、今日のあの舞台のように。

たとえば三毛さんの気持ちを奮い立たせる役だったにしても。

「……じゃあ愛ちゃん、俺たちやこつちやから」

「ん。じゃあ」

「バイ~~~~ン！」

手を振った。後ろ姿の二人。ナナが三十六に絡みつく。身をよじりながらも、腕を取られたままの三十六。

いいなあ、と思った。

ああいう姿を、「いいなあ」って、はじめて思った。

胸の奥に、なんだかあったかい、ちいさな火が、ともったような気がした。すごく、あったかい。

その火を消さないように、ゆつくり、静かに、帰路を歩いた。素敵な、夕暮れだった。

■ 4 ねこのお願い

——翌日。

昼休みにみんなでのんびりくつろいでいると、寧々子が教室入り口に顔を見せた。

手招く。ナナ、バシーンと殴って、行けと。三十六、へいへいと首をすくめて、向かう。

「……そいや昨日どうだったの？」

流乃がナナに訊く。

「いやもう愛先生大暴れ。これがなんと意外なことに演技の天才で。努力家三毛さんのハートにボオツと火を点けた」

「あら。よかつたじゃない」

美緒が顔をほころばせる。はなこも身を乗り出した。

「まるでサリエリとアマデウス？」

「……いいすぢ」

愛は照れている。

ナナは、答えつつも向こうが気が気ではない。

こういう時、和泉流乃は言葉通りの小悪魔になる。

「……んでなに、あれは脚本家に直訴？」

『あたしが主役だよね！ 絶対そうだよね！』」

「『そうさもちろん、決まってるだろ。』」

愛ちゃんに演じてもらったのは……すべて君のためさ』」

万能文化包丁娘・長居美緒にも欠点はいくつかある。そのひとつがノリがよすぎるところ。

「『よかった……あたし、さとの気持ちがあたしから離れちゃったんじゃないかって……不安だったの……』」

「『バカ言うなよ。僕の心のシナリオには、君の名前しかない』」

「『ウソ。きつとたくさんの女優の名前が刻まれているんだわ』」

「『みんなエキストラさ。主演女優はたった一人。』」

君だけさ』」

「『ウソよ。さとるいつもあそこの丸い人と一緒に居るじゃない』」

「『あの丸い人は、僕を食糧だと思っただけさ』」

「『さとる……』」

あたしもあなたに、食べられたい』」

「『いいのかい？ 僕はもう……腹ぺこだよ』」

「『うん……好きなように、貪つて』」

「『じゃあ……いただきます』』」

「キョヘエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!」

ナナ、発狂。

ネズミ花火のように暴れる。

「ちよつ、ちよつとおお、あたし殴つてどおすんのお！ 美緒、美緒殴れー！」

「流乃流乃、最初流乃だよー！」

「きひひひひ」

「二人ともノリが良すぎるんだよおー」

「……勉強に、なった」

「「あはははは」」

最後に呑気に笑っているのが、男二人。

いつもオフェンスの選手であるところの難波鳴海が攻めまくられて弱ってる姿は、申し訳ないけど面白い。

「……あんたらホンマ……地獄行くで！」

「ほらほらナナ、静かに向こうの動静に耳を澄まさないとー！」

「ハッ！ そや！ こんなことしとる場合やない！

盗聴器！ たくみん、盗聴器貸して！」

「さすがに持つてないよそんなのー」

「いつも盗撮してるやん！」

「盗撮じゃないって！ ……物陰からコッソリ撮ってるだけだよ……」

「ああもう頼りにならん！」

どどどどどどどど、どうなつてんねんやろおおおお……」

——三十六が顔を出すと、寧々子は言いにくそうに身体をモジった。

「……ん、なに？」

「あ、あのね、昨日のお礼。言おうと思つて」

「ああ、そんなん……ちゃんと昨日言うてくれたやん」

「うん、まあ、ちよつと軽かつたから……」

「ありがとう」

「うんうん。ええよええよ。あれからスムーズに進んだ？」

「うん。だいぶ雰囲気ほぐれて……」

へへ。あたしダメだな、集中しちゃうと他のこと目に入らないから、キツくなつちゃうのよね」

「うんうん。まあそやけど悪気あつてやつてるわけじゃないから、みんな認めてるわけだね。まあ、そのへんも、周りに確認しながら、落ち着いてやつていったらええと思うよ」

「……あ、あのさ、さとする」

「うん」

「あの、サッカーの方、忙しいのわかつてるんだけど、やつぱり、本番だけでも見てくれないかな？」

「ん？ んー……」

「きゃ、脚本家なんだから、責任、あるぞ」

「……見る、つていうのは、観客じゃなくて舞台袖入れ、つてことやんな」

「う、うん」

「それホンマにええんか？ 学園祭確かに試合の次の日やから、いけんのはいけるけど、その……部のみんなの気持ちがさ、そんな……最後のとこだけポツと来てぼいぼい指示出すの、そんなん……」

「ううん。それは昨日の夜正直なところ話し合った。

みんな、舞台がよくなればなんでもいい、つて」

「ねこが脅したんじゃない？」

「そつ、そんなことしない！」

「ごめんごめん」

「1年の子達なんてね、『あのカツコイイ人は誰ですか先輩！』 つて」

「そんなウソには乗らん」

「ほおんとだつてば！」

『あたしの彼氏』つて言っちゃつた」

「はい!？」

「それはウソ」

「心臓止まるようなウソ言わんでちよーだい。

んー、まあ、そこまで言われたらやらんこともないけど……」

「やた！」

「ありがと、さとり!!」

三十六の腕を掴んで、ぴよんぴよん跳ねるように身体を揺らす。

舞台では迫力抜群だが、普段三毛寧々子はスレンダーな美少女で、むしろ舞台での存在感を知るだけにさらに華奢に見える。TV。ピープルが実際に見ると小さ

く見えるように。

だからそんな仕草をすると、本当に猫がじゃれてるよう。

「……なんかえらいことになってますよ？」

「うん。かなりじゃれてるね」

「あーあ」

「……」

ナナ、なんかもう返しを入れる余裕もない。

「……あとね、もう一つお願いがあつて！」

……堺さん」

「あー……いや、うーん……」

困る。

それは俺に決められることではない。しかし、二人に——本人と上町大地に——頼めることでもない。

試合前に劇の練習出ろ、それはもう、『あなたサブだからチームの練習の方は少しはいいですよね?』と言ってるようなものだ。そんな失礼なことを、さすがに言えん。

「あつ、もう彼女なら練習出ろなんて言わないから!

最後通し一発来てくれればそれで十分だから!」

「う、うーん……なにさせるつもりさ」

「シンデレラに決まってるじゃない!」

「いへえ!? って、主役やぞ!」

「あたしだつてずっと舞台やつてるんだから！ 昨日の見て彼女にシンデレラ以外演つてもらおうなんて思わないわよ！」

「そんなこと言うたかて、そんなもんいくらなんでも無茶苦茶やろ、舞台監督も外の間、主役も外の間、なんて……」

「それでも。」

いい舞台ができれば、それでいい」

寧々子の目は、本気だつた。

いい目だな、と思つた。

確かにそうやって、彼女が継母をやるのが、舞台にとつても、彼女にとつても、そして演劇部にとつても、ベストだろう。

うぬぼれになつちまうかもしれないが、プライドの高い彼女が、こう言えるようになったのは、俺の……いやあ、違うな、堺愛のおかげだ。

じゃ、ま、一肌、脱ぐか。

三十六は顔をくしゃくしゃにして、手でゴシゴシ擦った。

寧々子はそれが、この人が本気で何かを考えてくれてる時の癖だと知っていた。

「……しゃあない。なんかやり方考えるわ」

「ほんとに!？」

わあ、やった! さとる、ありがと!!

無理のお礼はきつとするから! なにがいい!? なにか欲しいものある!?

ちよつと高いものでもいいよ!？」

「要らん要らん。最高の演技見せてくれ。それが一番の報酬」

「またカツコイイことばつか言つて!

冬だからセーターとかマフラーとかどう? さとるいつもボロ着てるじゃ

ん！」

「ええってほんまに。金のためにやってんやないんやから」

「そんなこと言わずに！ あたしの気が収まらない！」

「ん、じゃうまいこといったら、舞台から俺だけに投げキッス」

「またカッコイイことを……どうやったらそんなスルスルカッコつけセリフ出てくるんだろう……」

「あんたとおんなじで、こんなことばかり毎日やってますからね」

「わかった。約束する。」

あ、これ脚本。堺さんに」

「ああ、うん、ありがと。あ、でももし本人にOK取れたら、ちよつと変える」

「そうなの？」

「うん。」

逃がさんで。ヒロインは、あくまで、ねこ」

台本丸めて、彼女を指した。

キリッ、と唇を引き締めて、瞳を返す。

「逃げるつもりは、ない」

「よし！」

……いい舞台にしましょ」

「うん!!」

背を向けて、教室に戻る。

寧々子、その背越しに、サッカーチームの皆さんに、おじぎをした。

慌てて皆さんが、お辞儀を返す。

スキップを跳ぶように、小走りに去る。

「……ちよつとなにカラその背中すごい男前」

「うんうん、オトコマエ、オトコマエ」

流乃と美緒の冷やかしに、三十六はものすごい困り顔を、作つた。

「混ぜつ返さないでください。えらいピンチです」

「ピンチ？」

「……愛ちゃん。いや堺さん。」

こんなこと頼めた義理ではないんですけども……」

三十六は、ももに手をついて深々とお辞儀した。

「舞台、出てください。演劇部ピンチなんです」

「……」

首を伸ばして、きよとん、と。

「ねこがね、いや演劇部のみんながね、もう昨日の堺さんの演技見て、あの人と一緒にやなきや芝居にならんと。あの人居ないのに私達だけで芝居してもしようがないと。まなんですか、ミラクルズで言えば？ 2年生が全員居ないようなもんだと。そんなもんミラクルズではないと」

「あらら」

「昨日のあれだけでもうみんな堺さんのファンになってしまいました。

ぜひ一緒に、芝居、やってやってやってくれませんか」

「……でも」

愛の言葉を、三十六遮る。

「大将。

ここは俺と貴方の仲、大切な戦力だとは重々承知、しかしほんの少し、演劇部に貸してやっつては、くれませんかね。そう、クラブチームの監督が、代表チームにエース・ストライカーを持って行かれるがごとく」

「……ははっ」

大地は笑った。

さすが三十六だなあ、と呑気な感想を持った。

そんな言われ方をすれば、コーチとしては抗えない。

「それは僕より、本人だと思う。まして試合には被らないんだし」

「では、大将このように言ってます、堺さん」

「……」

「あ、いや、練習は、ねこはさつき『最後の通し練習一発でいいから』とまで言
ってました。さすがにそれでは厳しいかと思いますが、そのぐらいの、お時間の
取られ方で」

「……監督は」

「はい？」

「どう思われていますか」

ああ、ウソはつくもんやない。

その目はあくまで真つ直ぐで。

ぜんぶ、お見通し、つて感じ。

それも演技かもしれないが、役者の本能かも、しれない。

負けたと思った。

俺としたことが。

「俺が」頼むべきことやろう。他の誰が頼むんや。

「……出て欲しいです。いや、出てください、プリンセス」

「……はい」

笑顔に戻った。

花のような笑顔に。

「やりたい」と書いてある。

ホッとした。

「すみません、恩に着ます」

勝手に頭が、下がった。

「……ま、いいんじゃない？ 前線はウチ売るほど人居るから」

「えっ？ 試合、学園祭の前の日でしょ？」

「いや練習とかでも」

「ああ8―8とか？ まあね、適当になんともなる」

「あつ、でも愛ちゃん試合に出たら劇の宣伝効果あつたりして」

「ははは、さすがにそこまで余裕は無いと思うなあ……」

「ふふふ」

口々にそんなことを言い合う中、ふと三十六は気づいた。

うるさい人が、うるさくない。

……そーつと、横を見た。

その人は、机に突っ伏して、死んでいた。

「……あの、ナナ？」

「あーカラちゃんだめだめ、今彼女冥界を散歩中だから」

「えっ……昼メシでも当たったん？」

「当たったのはお弁当じゃなくて……」

「ああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

「ぎよわー」

三十六の胸ぐらひつつかんで押し倒す。

「なんじゃあれはなんじゃあれはなんじゃあれはなんじゃあれわーーーーー」
!!」

「また、なに、おま、ちやうつて！ 演劇部の！ 未来を！」

馬乗り。ぶんぶん。ごんごん。頭が床に。頭が床に。

「いでで、いでで、いでで、いでで」

「なんであの泥棒猫は嬉しそうにぴよん吉ぴよん吉跳ねてるの!?

あの継母そのものの気いキツツイ女王様がなにあれあんた見て田舎少女のよあ
あああああああああああああああああああああああああ!!!」

「あつ、だかつ、ちがつ、」

……投げ、キッス。
と、愛はメモった。

このまま三十六、頭打って今言ったこと全部忘れてくれたら、僕としては助かるなあ。

と、非道で貪欲なコーチは、思った。

改めて考えると、替えFWが一枚つていうのは、不安すぎる。
そう、ただそれだけでも、愛には価値がある。

「……ナナ、そろそろ止めてあげたら？」

泡吹いてる」

「……ほへ？」

あああああああああああああ、さ、さとる~~~~~！

ど、どないしたんや~~~~~！！

「ナナがやらかしたんだよ！！」

「へいつ!?」

ウ、ウチそんなことしてへ~~~~~ん！！

「やれやれ……」

「恋は盲目、か」

「盲目にもほどがあるよ」

「ナナ、意外に脆い」

「ウチは攻めの選手なんや~~~~~！」

守るのは、守るのは苦手なんやあああああ！

さ、さとる~~~~~！

帰ってきて~~~~~！！

そのまえに、逝かすな。

薄れゆく意識の中で空堀三十六はそう思った。

ま、愛されてる、ってことだけど、さ。

■ 5 インタビュー

——翌日。

放課後練習の途中で、散らばって思い思いに休憩中。座り込んでまた千里とバカ話してた可憐は、後ろの人影に気がついた。

「……可憐ちゃん」

「あ、はい」

人影しやがみこむ。愛さんだ。珍しい、なんだろ。

「……あのね。ひとつ訊いていい？」

「あ、はい、どうぞ！」

「可憐ちゃんが思う理想の相棒って、どんなFW？」

「あ……」

思わず千里と、顔を見合わせた。

しかもこれ、本人だ。

なんて答えりや、いいの？

「……えと、その」

「愛先輩。それって、要はカレが愛先輩にやって欲しいこと言えばいいんですよ？」

「いつ!？」

こくり。

千里のあまりの単刀直入に驚く可憐だが、愛先輩は迷いもなく頷いた。

「え、えつとその……」

「落ち着いて考えろよ、カレ」

「わかつてるよ！」

「いなり寿司欲しいとか、んなのダメだぞ」

「あたしキツネじゃなあい！」

「……」

いつもの漫才にも、愛先輩は笑わなかった。

可憐、無い頭を真剣に回す。

カラカラと、音がした。

「……あ、愛先輩は、全体的にバランスが取れてて、特に困ったところは無いんです、が」

「特徴が、無い？」

「あ、えーつと……いや、その」

「キタンのない、ところを」

「うーん……あ、あたし的には、『FWらしいFW』つぼくって、好きです」

「……」

「す、すみません、イミフなこと言っつて」

「だからそれもーちよい具体的に言えねーのかよ」

「そんな賢かったらあたし苦労してない！」

「まあまあ」

涙目の可憐を、慰めた。

「あんたらしくもねー、氣い遣わずにいーたいこと言えよ思いついたままー。
つまり、あんた的にはどーして欲しいんだよ、愛先輩とか、相方とかカンケー
無しに」

「ン、ン〜、ン〜〜〜……」

千里が子どもの頃に再放送で見たとんち小坊主のアニメのように、可憐は両の
ひとさし指を頭に当てた。

……コイツホントに頭使うの大変なんだな。

やっとな、出る。

「……ら、楽したい」

「「楽？」」

意外な言葉が。

「あたし9番着けてるからか、どことやってもアイツ狙えってマークされんの。2トップつてさ、二人マークされるから、2トップだよね。けど胡桃先輩だと高さ担当ポスト担当ってハッキリわかってるから、地面走るときはばーつと寄ってくんの相手ー。みんなでー。」

その時ああもう一人がいてくれたら楽なのになー、つて思う。

なにかやっつて欲しいことあるかっていうと、それ。

たまにはあたしもフリーになりたい」

「ありすじゃダメなのかよ」

「あー、居る時と居ない時と極端だもん。居るかと思えば居ないし、居ないと思

えび出てくるしー。いつも居てくれないと、意味ないよー」

「……つまり、囧？」

「えっ!? いや、そーゆーわけじゃ……」

囧という言葉は、キツイと思った。

「そーとしか聞こえねーよ。あたしが決めるから、スペース作れって」

「違う違う、決めんのはどっちでもいいーの。てか、決めるFWじゃなきゃ囧にもなんないじゃん。胡桃先輩は囧じゃなくて、壁なんだよ」

「……」

なんとなく、おぼろげながら、わかった。

しかし難しい。

要するに可憐は、自分と同じぐらい優秀なストライカーがもう一人、欲しいのだ。

胡桃さんは抜群に高くて強い。「サッカー選手」としては一流だ。しかし、「ストライカー」として見れば、可憐からは正直落ちる。

しかし難しい。難しい。難しい。

可憐と同じ能力を身につけるなど、不可能だ。

「ほらー、愛先輩困ってんじゃーん」

「だっ、だっってそんなこといきなり言われても……」

「いきなりじゃねーだろ」

「うう……」

「……わかった。ありがとう、可憐ちゃん」

さわさわ。

また涙目の可憐の頭を、優しく撫でた。立ち上がる。

「……なんとか、してみます」

自分にできることはなにか。
考えてみる。

「おつ、さすが愛先輩だよ！」

「……舞台に、立ちたいもの」

自分でも知らずに、そんな表現が出た。

そう、舞台に、立ちたい。

だから……なんとかする。

「ほら！ さすが愛先輩！ ちー、あんたもね、あたしと無駄話してる暇があったら、もも先輩にでも聞いてきなよ！ 理想のGKってどんな感じですか！

と！」

「ん、んなの聞かなくてもわかってるよ！ もーさんだぞ!?

『忍ちゃんみたいなの〜』

とか言うに決まってるんだろ!？」

「あー……いや、わからん！ あの人ボケケーツとしてるようで頭ん中はケーキとお菓子でいっぱいだから、きつとなんか考えてるよ！」

「考える余地ねー！」

また可愛らしくぽかぽか殴り合う後輩を見て、ふと思いついた。

「……じゃ、次もし試合出ることができて得点できたら、二人にケーキ、奢ります」

「えっ!？」

「マジっすか!? ってあんたそんなもんに釣られんなよ」

「わ、わかってるよ! まず自分。まず自分」

「『エスポワール』の、エスポスペリオール」

「『エスポスペリオール!』」

一カット一二〇〇円もする大物だ。

「つ、釣られんなよ!？」

「わ、わかった、わかった」

「ふふふ」

奢れると、いいんだけど。

「……練習再開で—————す!!」

マネージャー古都の声が聞こえた。

三人は、声を揃えて返事をした。

—

——もう一人、訊かねばならぬ、人がいる。

チャンスを見計らった。その人は、なかなか独りにはならない。

練習が終わった。クラブハウスへ戻る道すがら。みんな口々に疲れたと喚いたり、練習の話をしたり、試合の話をしたり、寄り道の相談を、したり。独り。

身体を寄せた。囁く。

「……大ちゃん」

「ん？」

「……私は、どうすれば、いいのかな」

それで通じると思った。

目は同じ方向を見たままだったけど、声は甘くしてみた。

その武器は使っちゃいけない、と言われたけど、やってみたかった。

通じるとも思つてない。

「……」

「……」

黙つて並んで、歩いた。

実は大地にとつても、それは以前からの大きな課題であつて……

以前、可憐の意識を鍛え直すために愛に代わりに出てもらったことがある。しかしその時僕は、適切な指示が出せずに、もう、モロに当て馬、代わりという扱ひしか、できなかつた。

彼女のいいところを、引き出してやるのが、できなかつた。

それが悔しくて申し訳なくて……

いつか、彼女にぴったりの「舞台」を、用意してやらねば、「役」を用意してあげなければ……と事あるごとに、思ってた。

そういえばさつき、しゃがみ込んで可憐と話していた。

その組み合わせは、珍しかった。

これのことか。

珍しかったが、意外にしっくりきた。練習着だからついてないけど、ユニフォームの背番号、9と11が並んでるように見えた。

いい感じ、だった。

今でこそローテーション制も当たり前で、ビッグクラブも代表チームも選手がどんどん入れ替わるから、背番号へのコダワリなんて言ってられない。でも、9

番と11番の2トップが並んでるのは、古典的で、スタンダードで、頼れる感じがして、落ち着く。

二人のいずれ劣らぬ強力なFWが、お互いに切磋琢磨し協力し時にはライバル心を剥き出しにしてゴールを奪い合う。

そう、どんなポジションでも、「ライバル」は必要だ。可憐は可哀想に、ウチのチームではそんな選手が居ない。

欲しいと言えばそれが欲しい。しかし、それは、無茶な相談……

部室のドアが迫る。もう時間が無い。

……ふと思つたままを、そのまま言ってみる。

どうしろ、ではなくて、どうあつて、欲しいかを。

「……自立て」

愛、意外な言葉に、きよとん、とまた首を伸ばす。
最近、多い。

「……わかりました」

わかって、ないけど。

大地は目もくれずに部室へ消えた。自分は、シャワー室へ足を向けた。

『……めだつ』

どうやって？

それは、苦手。

でも、そのためのやり方をよく知ってそんな人を一人、知っている。

……最近よく頼ってるな。

なにかお礼をした方が、いいのかしら。

やっぱりケーキとか。

でも男の子だし……ああそういういえば、「投げキッス」とか言ってた。

でも、ねこちゃんと同じっていうのも……芸がないよね。

それは後で考えよう。

とりあえず明日、その人に、相談を。

——ところが物語って、動き出す時には一気に動く。

ナナちゃんが

「腹減った〜〜！ ラーメンや〜〜！」

と絶叫して多くがそれについていった。

私はどうも気乗りしなかったので遠慮しておく。

参考になるビデオでもないかと部室を覗くと、コーチが、いつものように、本を覗き込んでいた。

さっきの今で、入りづらくて、別に入ってもいいんだらうけど、踵を返す。

もう暮れる晩秋の校庭脇を歩いていると。

……見慣れた、ちよつと猫背の、ちよつと疲れたような、でも不思議な存在感のある背中が、前に。

「……空堀君」

「……あ。愛先生やないスカ」

とと、と駆け寄る。笑う彼、でもちよつと疲れているみたい。

「練習終わり？ お疲れ様です」

「いいえ。そちらは？」

「舞台見てました。愛ちゃんのおかげで、だいぶ熱入ってましたよ。雰囲気も随分明るく」

「そう。なにより」

「ぶつちやけで訊いてみたけど、みんな愛ちゃん待っててくれてるみたい。こりやちよつと考えなあきませんね」

「……責任、重大」

「ははは。大丈夫ですよ」

ちよつと他人行儀な口ぶりが、今まで気を遣つてたんだな、と思う。彼はまるで気遣いマシーンのように、方々に気を遣いまくる。

ああ、だから逆にナナちゃんのように感情剥き出しでボンボン当たってくる方が、楽なのか。世の中、うまくできてる。

「……あ、みんなは？」

「ナナちゃんをツアコンに、『山嵐』ツアー」

「ははは。あー俺も行こかなあ……いや、仕事すつか……」

「お仕事？」

「ああ、うん、劇部のみんなの熱気見てたら、ちよつとちゃんと脚本やりなおさな、思て。」

いやー、安請け合いしちまつた」

ぽりぽり、頭を搔いた。

なんでもパツパカパツパカ解決案をどんどん出してくる彼には、珍しい。

「でも、カラちゃんなら、すぐ」

「いやいや、ネタがありやね、すぐやけど。大元になる、ネタがねえ……」

「お手伝い、できる？」

「いやいやいや、そんな……いや……」

すつ……と覗き込まれると、遠慮しきれなくなる自分が居る。

ああ、こんな美形が目の前に居てくれたら、そらあ空想も想像も妄想も、ぶんぶん沸いてくるやろう。思いついたセリフの一つを実際に演じてくれたら、それ

をキツカケにワンワンアイデア沸いてくるやろう。

「……実は、ね」

「ん？」

愛ちゃんが目を伏せた。長い長い睫毛が、すごく綺麗。

「私も、相談が、あるの」

「なんと。劇の話？ んー、サッカーの話？」

「両方」

「なんと。乗りましょう。それは乗りましょう」

「じゃあ、私も」

「……」

「……」

「はははっ」「ふふふふふ」

相手の立場に立つ、ということが、人間なかなかできないものだ。

「……まいったな、じゃあ、ちよつぱりだけお願いしよかな。

えと、今からとかでもいけます？」

「もちろん」

「じゃドーナツ屋かな……いや、んー」

あそこは、顔を指す。

いや、指されても全然いいんだけど、みんなラーメン屋行って二人でつちゆーのは要らん誤解を……いやそれは意識しすぎかなあ……とゆーて全然普段行か

ん喫茶店とかに居てもしそれが誰かに見られて……いやあ。

「じゃあ、うちに来ます？」

「はいっ?! いやそんな無茶な」

「近いから」

「いや距離はその」

愛ちゃんは徒歩通学。

「あ! そや部室!」

「コーチが猛勉強中です。あともうしばらくするともう一人追加」

「あー……そやねー……愛の劇場は、邪魔したくないねえ……」

「愛だよね」

「愛ですよ。愛としか言いようがない」

「私も、愛です」

「はい。それはもう」

「だから気にしないで。なんのおかまいもできませんから」

「いや、『だから』の意味が……」

「善は急げ、です」

「は、いや、えー……」

すたすた、歩き出す。

……ええい。

普段にない堺さんの積極性に、引きずられてみる。

こういう時は、転がる方へ転がるのが、いいんです。

鉄板の方を選択したって、なんにも新しいことは、起きません。

空堀三十六、好奇心にはいつも負けることにしている。

■ 6 作戦会議

——愛ちゃんの家は、学校からテクテク歩いて三〇分近く掛かる。下町の小さなお家が入り組んだ一角にあつて、その中でも細いバス通りから一本私道へ入る。奥まった長屋仕立ての、昭和の香りぶんぶんする木造の細長い小さな家。

「……狭いですけど、どうぞ」

「掃き溜めに鶴」という極端に失礼な文言が三十六の頭に浮かんだ。

てつきり勝手に、白亜の瀟洒なお家の、芝生でブランコがあつてレトリバーが出てきて古いイギリス車が置いてある、そんなお家を想像していた。

だが三十六も下町育ちで、子どもの頃から友達の家といえはこういうところか、

2Kの古い団地だった。逆に親近感が沸く。

「……お邪魔します」

中は暗かった。

「……お家の人は？」

「お婆あちゃん、まだ病院から帰ってきてないみたい……」

「あらっ。どなたか、ご病気ですか」

「うん。おじいちゃんが」

パチン、とスイッチを点けると、生活感溢れる六畳間を和風ペンダントライトが映し出す。

下にちやぶ台、壁際に一四インチブラウン管。一応その下にビデオデッキはあった。なんだか本当に、二〇年ばかりタイムスリップしたみたい。

「大変やねえ。ええの、僕こんなところ来て」

「うん。もう長くて。今日明日ぽっくり、って病氣じゃないの」

「あはは。でもおばあちゃん、大変やね」

「家で世話しなくていいから気楽、って言ってる」

「ははは」

それは嘘だろうが、そういう冗談がいえるくらいの余裕はある、ってことか。

「あつ、どこにでも座つて。ごめんなさい」

「あ、はいはい」

入り口に近いところに、ちよこんと正座した。

「おぎぶ使つて。どうぞ、お膝を崩して」

「あ、はい、すみません」

「……ふふっ」

「ん？」

「空堀君は、気を遣いすぎです」

「えっ？ いやあ……」

まあ確かに友達の家来てそこにすでにある座布団を避けて座るのは、俺も自分でどうかと思う。しかし、なんとというか、かんというか。

「……これが個性、つてことでひとつ」

「ふふふ。素敵な個性ですね。」

……あ、嫌味でなく」

「うん。損もしてるが得もしてる」

「たとえば？」

「プリンセスの大邸宅にお邪魔させていただけてもらえた。こんなこと墓場まで持つていかないと男性諸氏の嫉妬の炎に灼き尽くされます」

「ふふふふふつ。」

あ、お飲み物を。気がつかなくて」

「いやいや、いいツスよ、いいツスよ」

「私もいただきます」

「じゃ全く同じので」

「……冷たい麦茶でも、いい？」

「イエッサー！」

冗談で言ったことに自分でドキドキする。そうだ考えてみればしかも二人きり！ではないか。

な、なんかビミョーだ。

いやいや待って待って三十六、愛ちゃんはチームメイト。そして女優。大切な商品です。

商品言うな。

つていうかお前にはな!?

いや、俺は、俺はそんなんちやうと思つてた。

正義と愛の人やと思つてた。

せやけど、せやけど人は……状況に、弱い。

だってこんなシチュエーションさ、あなた、もう一生無いよ!?
言うてて悲しいけど。

でも、無いよ現実的に合理的に考えて。

こんな美女と差し向かいであーた、ほれ、あーた。

いやいや待って待って三十六、美女とか意識すんな。

と・も・だ・ち。うん。

「……あ。あのね」

お盆にグラスのコップが二つ。それをトントンとちやぶ台に置きながら。

「すみませんッス。なんででしょう?」

「着替えて、いいですか」

「あああああ、もちろん、お楽に、お楽に。」

……あ。

あああああ、出ます出ます、外出ます!!」

このお宅では、閉鎖空間が無い。

「ううん、そっちの隅で大丈夫」

「いや俺が大丈夫やないんです!! いやいや、いや、大丈夫なんですけど!」
なに言うてんねんおれー！ー！ー!!」

「お気遣い無く。お茶、飲んでて」

すたすたと。

「わ、わー！」

「こつち向かないで、ね」

「はいもお、未来永劫明後日向いてます背中向けてます~~~~~!!!」

あの、ご不安でしたら手ぬぐいで目隠しでも~~~~~!!!」

「ふふふふふっ」

背を向け自主的に目を手で覆う。がた、がたとふすまと衣装ケースの音がして、

するっ……

と衣擦れの音なんかも聞こえてきちゃう。

聞こえてきちゃう。

今、今ここでパツ、と一瞬でも振り返れば、事故でも装つて振り返れば、ああ、あの類い希なる美貌の王女の白い半裸の、いや半裸とか言うなヤラシイなあもお、下着姿、そう下着姿でも十分ヤラシイですつ！何言うてんねんおれ—————
—————!!!

「……あつ、あの、えと、ご、ご両親とかは、お仕事ですか!!」

あまりに間が持たないのでそんなことを絶叫してみた。

意外な答え。

「うん。」

「砂漠の真ん中で」

「……あら。そうなんだ……」

さーつと状況が飲み込めた。なるほど、海外にご夫婦で。プラント関係とかだろうか。ここは父方か母方かはわからないがそのご実家なのだろう。確かに、砂漠の真ん中となると年頃の娘は連れて行きにくい。

「……大変やね」

「ううん。ぜんぜん」

ここ、あまり裕福とは言い難そうなお家なのに、愛ちゃん自身の金回りはごく普通で、みんなと遊びに行っても普通にお金を使うし、ケチでもない。そういう、仕組みか。

愛ちゃんはこの静かなお家で、おばあちゃんと二人、静かに暮らしてきたんだ。だから、着飾らない。そんな必要、無い。

だから真つ白で、どんな役でもスツ……と入り込む。なるほどね。

そして俺がいるのに堂々と着替える羞恥心のズレ。

これだ。これも才能だ。

役者は、「照れ」という感情が壊れてなければならぬ。

羞恥心ゼロで道ばたで眠れるか、もの凄い照れ屋で舞台で爆発するか、どちらかだ。

……背後に気配がした。

「……はい、すみません、もういいです」

「いいですか」

「はい」

……待てよ三十六。

パツ、と目を開けたらスケスケのネグリジェとかやったらどうしよう！

それはもう襲つてええよな！ 襲つてええよな！

「スケスケのネグリジェ」とかいうなオヤジ—————！！

てか襲うつてどうすんねん—————！！

おれいつも襲われてばっかりやから—————！！

それはノロケか、ノロケなんか—————！！

あつ。

おかあちゃんごめん~~~~~!!!!

「……目、痛いのか？」

「あいやいやいや！　ちよつと疲れ目で！」

ぐりぐりやってた手のひらを外した。

……学校ジャージャーージ。

「……またカジュアルなファッションで」

「うん。お家ではいつもこれ」

「もつたい……んー……」

ない、と言いかけて、このべらぼうな美女がイモそのものの学校指定紺色ジャージ胸に「堺」の漢字刺繍入りを着こなしているアンバランスよ。

むしろ、イイ。

「動きやすいしなあ！」

「うん」

にこつ、と笑った。

ああ、おはなちゃんよー言うわ。ファッションについて。

「結局『人』だ」と。

美形はなに着ても似合う。どんならんわこれ。

「……で、では始めますか。

つて、どっちの相談から」

「じゃーんけーん」

「「ほん」」

愛が勝った。

手のひらを上に、「どうぞ」のポーズまるで老舗旅館の女将のような。

「はい。では。えー……」

僕が今考えてるのはですね、愛ちゃんには悪いけど、やっぱりねこを、寧々子
継母をヒロインに据えてゴリゴリ行きたいと思うんです」

「さんせい」

ぱちぱち、と口元で小さく手を叩いた。

「愛ちゃんをね、真ん中にする、一人で持つていってしまいます。

これを、ねこを真ん中にして貴女を脇に置くと、これ二人とも目立つ。

いわば2トップでございます。

この方がチームとしての破壊力は、倍増！いやそれ以上！」

「なるほど〜」

「さあそこで、要は王子様とシンデレラが結ばれてからも様々な悪事を仕掛けてくると、そのへんのアイデアとか、虐められる方の立場として、いや結局どれも失敗するんですけど、そう子供向けアニメの悪役みたいだね、そのへんを……」

「……シンデレラ、だから、童話のエピソードはどうかかな」

「ああ……」

ああやっぱりあんた大女優だわ。そんな一撃でわかりやすく強烈なコンセプトを持ち出してくるとは。てかなんでそれに俺気づかん、俺」

「専門家の方が、見えなくなってることも多いです」

「も、まったく、おっしゃるとおりです」

三十六は深々頭を下げた。

俺のアイデアを刺激するためにいて欲しい、なんて思い上がった自分が恥じた。

二人は脚本とルーズリーフを広げて、思いつく童話のエピソードを書き出し始めた。

——A4が一杯になり、麦茶の瓶が空になったところで、ひと区切り。

「……よおし、これでなんとかなるぞお……」

「……」

愛はあらためて三十六を尊敬した。

たった一言言っただけで、山のように知識と文脈が雪崩れ出す。ああこういう人が文章を書く人なんだ、と思った。引き出しの数と量が違いすぎる。

紙に書かれたぶつ切りの単語から、既に彼の目には脚本のイメージができていくらしい。市場で跳ねる魚を前にして、洗練された料理をイメージする料理人のごとく。

私は作文って、文章を作っていくのが、大変だと思ってた。

違う。

いつだって、問題は「イメージ」なんだ。

そう、演技とまったく同じ。

実現手段はあとからなんとでもなる。無ければ鍛えればいい。

問題は、イメージ。

「あとはラストだけやなあ……ラスト……今パツとええのが思い浮かばん……」

「継母が、死ぬ」

「うーん。そやねん。それが鉄板やねん。ほんでそんでええとも思うんやけど、
そこの場面のイメージが……うん、たとえば……」

心優しいシンデレラは今際の継母に、彼女にピッタリのガラスの靴を贈る」

「んー……」

唸って顔を歪めた。

それは優しさか!? 強烈な嫌味ではないのか。

「これを優しさに見せるのが、愛ちゃんの腕よ」

「ん……」

そう見せるには本当に無垢そのもの純粹そのものの少女になりきらねばならぬ。
い。

難しい。難しい。難しい。

「いや彼女にも葛藤はあった。しかし、命尽きなんとしている継母が一番欲しかったものと言えば、あの、運命を変えたガラスの靴ではないかと思いきり、あえてそれを選ぶ。たとえ嫌味な女と思われようとももし義母が万が一にでも喜ばば」

それを演技で表現しろと言うのか。

なんと高度な要求だ。

私は、昨日今日演技を始めたばかりなのに。

……ムカついてきた。

男の子ってホントに勝手。

自分のやって欲しいことだけこつちに投げ捨てる。

あの人だつてそう。

そんな、小学生時分から全国に名前の轟く天才FWと、コンビ組めなんて、こつちキャリアー1年ちよい、できるわけない。

しかもライバルは中学日本一のバスケットと、本場ブラジルのストリートで揉まれた本物。

ありえない。

なのにもまるでそんな三人と競い合うのが当然かのように私を扱う。

無茶苦茶にも、程がある。

「……あ、やっぱり難しい？ もうちょい無難な方がいいかな……」

そして顔をしかめると、こうして怒るママを前にした男の子のようなご機嫌伺いの目。

そんなので、母性本能とか刺激しても、だめ。

「……私はいいの。三毛さんが」

「ああ、それは大丈夫。ねこは根性ガールやから。難問与えれば与えるほど、伸びる」

「……」

私だつたらどうする？

その靴を見て……

抱えて微笑んで、死ぬ。

エンディングが静かすぎる。

地面に叩きつけて、呪いの言葉を吐きながら、死ぬ。

後味が悪い。まとめが要る。

「……三毛さん次第……かな……」

「ん。じゃあ明日これで訊いてみる。

あー……やっぱピカレスクっぽく最後まで

『明日こそあんたをその座から引きずり下ろしてやるわ、待ってなさいシンデレラ！』

と叫びながら息絶えて」

「ラスト私が王子様と一緒にお墓にガラスの靴？」

「バレましたか」

「なんとか曜日サスペンス劇場の定番です」

「ただその場合はセリフが思い浮かばん。

『お継母さんはいい人でした、だって貴方と結びつけてくれたもの』」

「うそくさい」

「そやねえ……うーん……そやねえ……」

『お継母さんには大切なことを教わったわ。相手に関心を持ち続けること。無関心こそ、愛情の反対語だと』」

「A—C—」

「公共広告機構です……ダメか……」

「そこも三毛ちゃんに訊いてみるのはどうでしょう。彼女の方がそういうところは得意っぽい」

「ん〜……そうすつか……ん〜……」

あ、そだ、煮詰まったから愛ちゃんのご相談の方を承りましょ」

「あ」

ちよつと居住まいを正して、正座する。

「……たいした、ことでは、ないんです。

私は……

目立ちたいんです」

「ほう！ 目立つ。

それはまた普段の貴方からは最も遠い」

「だからよくわからなくて……目立たせる、というなら、さとるくんかな、つて」

「うむ！」

そう頼られたら、力こぶも出る。

「……いやまああなたはね、ぶつちやけた話、ほつといても目立つんです。

ご自分では慣れっこになってるから意識しないかもしれないかもしれませんが、あなた、ぷーとそのへん歩くだけで男の視線は釘付けなんです。

もうね、今言うの微妙ですけど言っちゃいますと、ワタクシがあなたのお家に招待されましたお手自ら淹れていたいただいたお茶を二人でいただいたなどと申しますれば、嫉妬と羨望で発狂する男がいったい我が学園に何人いることやら……」

「おーげさ、です」

「いやいやこれ洒落抜き誇張抜きでー」

駒川匠、写真部のエースにしてミラクルズお抱えカメラマンが、ひとりひとりのブロマイドを作成し、それをチームは公式に販売して資金源としている。もち

ろん管理しているのはこれここにいるプロデューサーの空堀三十六で、「個人別売れ行き」などといった生々しいデータも把握している。

愛は3位。

ぶつちぎり1位でないのはそこはミラクルズがサッカー・チームであるからで、1位天王寺ありす、2位西九条明日葉、はレギュラーポジションを持ち、実にカッコ良く決まったユニフォーム姿の写真が多いから、だ。制服・私服姿だけならわからない。

またミラクルズには写真集もある。学年別三分冊。それぞれの魅力を活かそうと衣装に凝りすぎてコンセプトが不明瞭になってしまった2年生編でも、一番の人気といえばやはり、ウエディングドレス姿の愛ちゃんだった。

いやだからつまり、もう目立つとる。

「……でも、ピッチでは、目立たない……」

「ああ……」

そこは、さすがに。

あそこは実力と結果でしか、存在感を發揮できないところだ。

たとえばキャプテン。普段は地味目の家庭的雰囲気売りにする彼女だが、いざやピンのユニに身を包みピッチ中央、中盤底のポジションにデンと構えるともう「存在感」という漢字三文字以外の何物でもない。もビデオなんか見返すとあっちこっちで背番号10が目についてウンザリするほどである。

そういう、ものだ。

愛ちゃんは途中交代で入っても囲みたいな役が多くて、エース・可憐が突っ込

むその露払いみたいな地味な役目をコツコツと……

いや違うな。

役割が地味でもプレーにキレがあれば、目立つ。

スペースを埋める無駄走りばかりのエレーナも、右サイドバックでジツと相手の出方を伺い続ける明日葉も、調子のいい時はちゃんと目につく。

違いは何か。

キレを生み出す原料は何か。

思い切りだ。勢いだ。開き直りだ。気迫だ。集中力だ。そして、自信だ。

……ムカついてきた。

あんたほどの美貌に生まれりゃあ、なんだってできるだろ!?

なんだその自信の無さは。世の中には己を醜いと思い込んでそのコンプレックスに一生苛まれる人だつて居るんだ。

キスしてやるから百万貢げとでもいえば、本気にする男はいくらでもいる。いや俺だつて借金してカネ作っちゃまうかもしれん。

君に必要なのは、そう、言い切る、勇気だけだ。

「……………あの、やっぱり、結局、プレー内容、だね……………」

その表情だ。

君がそんな悲しげな表情をすれば、今までなら周りが全部なんでもしてくれただろう。

ピッチではそうはいかん。

佇めば、邪魔だといわれるだけだ。

そもそも悲しんでる、暇もない。

ボールは、一瞬も、待ってくれない。

そう、舞台の上のように。

「……演じんねや!!」

「……」

思わず大声を、出してしまった。愛が目を丸くする。

「俺達はある程度君のことを知ってるけど、相手は知らん。ウチらはリアル・マドリードやないんや。敵に偵察されて丸裸にされてるなんてことはない。向こうかってビビってんねん、途中から11番入ってくるいうたら。しかもなんや、ゴツツイ綺麗な髪の長いスマートな、美少女や、『こ、これどうすんねん』思うや

ろ。しかも大抵くーちゃんの代わりや。あの超高層ビルみたいなの代わりに入
つてくんねんから、なんか飛び道具ある思うやろ。

騙せ。

なんか凄い選手やと思わせたらええねや。どんな手段でもいい、踊ってもいい
転がってもいい、目引いて注意引けばええんや。その隙に点は可憐やナナやあり
すやキャプテンが獲ってくれる。あんたは……

愛ちゃんは、演じてたらええねや！

シーズン四〇点獲れるスーパーフォワードを!!

「……」

マシガンのように放たれるその言葉を、愛は全身で受け止めた。
のけぞるような感じがした。

熱いなあ……

まるで言葉の弾丸が、撃ち込まれたみたい。
でもこの感じ、嫌いじゃ、ない。

「……うん」

ぱあつと、顔がほころんでいくのが自分でもわかる。
それなら、私にも、できる。

「……ま、まあ、演じろ言われても難しいかもしれんけど、そこはそれ古今の名
FWのビデオでも見て」

「ふふふ……はい！」

自分の熱さに照れて頬を搔く彼に、「監督！」と叫んで飛びつこうかと思った。

もつと困った顔が見たい。

男の子って、かわいいな、と思った。

『いい監督なら、導いてくれるはず』

そのとおりだった。

こんな、簡単な、ことだなんて。

嘘みたいだ。

ううん、そう、嘘じゃない。

演技。

……カラカラカラカラカラカラ……

「ただいま」

「あつ、おかえりなさい！」

「おつ」

「愛ちゃん、遅くなつてごめんね。あら、お友達？ いらつしやい」

「はい、お邪魔してます！ すみません！」

おばあさんだ。

ああ、なんと上品でお美しい。

銀髪を上にとめたヘアスタイル、美しい卵形の顔の輪郭、やつぱ遺伝なんだ

……

「愛ちゃん、お夕食は？ 食べたの？」

「ううん。まだ」

「じゃあすぐ仕度するわね。……あの、どちら様でした？」

「あ、はい、空堀三十六と申します！」

あの、僕もう失礼しますんで、どうぞお気遣いなく!!」

「あらあら。そんなことおっしゃらずに。なにもありませんけれども」

「さとるくん」

「いえいえ、いえいえ、ホントに。」

ウチおかんメシ食わんとうるさいですんで、よそで食べられへんのですよ」

」

「そおお？」

「愛ちゃん、まあ、ほな、今日はこんなところで。」

だいぶ進んだ。ありがとう。めっちゃ感謝」

「ううん。こちらこそ。」

とつても、ありがたかった、です」

「いやいや。いやいや」

三十六大慌てて店を畳む。

逃げ出すように、靴を履いて玄関を出た。

送ろうとする愛を、

「あもうここでここで。また明日、学校で！」

「……うん。」

「さとる」

「あい？」

「お礼、したいんだけど」

しなつ……

「いやいやいやいやいや、もおやめてー！ー！ー！」

三十六半分冗談半分本気で、目を閉じて耳を塞いだ。

またナナに「床に釘を打つトンカチの刑」を喰らいたくない。

「舞台の上から、さとるだけの投げキッス」

「やめて~~~~~~~~!!」

「そおお？」

「もおホンマ洒落になりませんから。」

僕への一番のご褒美は、いい演技。これ、これでございます。

ああそうだ。ピッチでは得点。そう、得点決めてくれたら、それがお礼ですよホ

ントに「

ふふふふふ……はい。」

そうですね」

「わかってくれましたか……さすが大女優。

期待、してます」

「はい監督」

手を振って、砂利道をバス通りへ下っていった。

通りに出たところで振り返る。

私ももう一度、手を振った。

手を振られた。

「……お邪魔しちゃった？ 愛ちゃん」

「ううん。もう終わるところだったの」

「お勉強？」

「うん、そんなようなもの、かな」

「いい子だわねえ。コイビト？」

「うううん。あの人には、とつても素敵な彼女がいるの」

「ああ、そうでしょうねえ。モテそうねえ」

「モテるよ。すごく。」

演劇部の監督さんなの。部の女の子みんなキラキラした目で見てる」

「はー、監督さん。」

あれ、あの人、愛ちゃんがいつも言ってる監督さん？」

「あ、あの方はまた別の人」

「すごくモテるって」

「もつとモテるの。異常なほど」

「愛ちゃんの学校には二枚目が揃ってるのね」

「うん」

——おばあちゃんのお料理を、ちゃぶ台に並べる。

今日のメインはひじきの煮物。

席を替わって座ると、おぎぶがぬくい。

普通気持ち悪いものだけど、我が家では珍しくて、なんとなく、うれしい。

あ、ううん、さとるくんが、とかってじゃなくって、

その、ひとのぬくもりが。

その。

「……………なに、にこにこして、愛ちゃん」

「……………え？」

う、ううん。今日のひじき、おいしいな、つて」
「あら！ まあ、ホホホ、いつもと同じですよ、ホホホ」

照れて笑う祖母。

可愛い孫を、演じた。

嘘はよくない、と思つてた。

いいじゃない。

まわりが、そして自分が、幸せになれるなら。

ひじきの味が、心に染みた。

■ 7 改造計画

——翌日、昼休み。

昼食後、さてのんびりしますかねと伸びをしたあたりで。

「……さとるくん」

「あい」

「これを」

「ん？」

愛が三十六にすつ、と手紙のようなものを渡した。薄いブルーの花模様の押さ
れた愛によく似合う封筒で、封はしてない。

「お、ラブレター」

「るのお」

「なん・てー！ー！ー！ー!?」

もホントにこの流乃という女は常時小悪魔であり、まるで「ラブレター」であることが事実であるかのように言い切る。「ラブレター？」とか訊かない。これが怖い。これが。

「違う違う、違う！　ねえ愛ちゃん」

「んー」

「否定してくれ」

「ちよつ、見せえや」

「あかんあかん、親しき仲にも礼儀あり、これ一応親書ですから、親書ですか
ら」

「なんやのん最近二人怪しいー！ー！ー！」

「怪しいよね」

「怪しい」

「あははっ」

美緒、はな、蘭が火の手を煽るが、

「ふふふ」

と愛は微笑んだまま。

ま、ラブレターならこんなところでは渡さんわ。中の四つ折りの便せんを開いて、

「……だはははははははははは」

三十六、思わず笑い出す。

愛を見る。ニツコリ、笑ってる。

「いや……これ……あはは、昨日夜考えたん？」

「うん。どうかかな」

「いや……あり……ちゅやあ……ありかも……いやあ……

無し、では、ないかな……ぷぷぷ」

「なになに、なにいなあ!!」

三十六の様子に、ますます興味が沸く。

「いやいや、これは人には見せられませんね。トップ・シークレットでござい
ます」

「えー!?」

「心配すんな、ラブレターとかそんな嬉しいものでは一切無いから」

「嬉しい言うな!」

「浮気してる男ってそんな風に言うよね」

「るのお」

「なにいなあ、劇の方の話?」

「いや。あ、いや、そつちとも言える。」

「まああれだ、すぐわかる、すぐ。その時俺が笑った理由もわかる。ね?」

「うん。」

「……いけそう?」

「やってみます。おもしろそうです。」

結果は……もちろんわからんけど、やってみる、つてことが、だいじです」

「うん」

「あそうだ、こつとんには立場上看せますけどいいですよね？　もちろん他言無用で」

「もちろん」

「あのゲラちゃんが笑い堪える様が今から楽しみや。」

おほほほほ」

「めっちゃ気になるわ〜〜!」

「あれよ、主演女優の熱演っぷりに期待、つてことです」

「大根ですけど」

「ん。これちよつと急いだ方がいいな。今からこつとんとこ行ってきます」

「あ、あんた」

言うが早いか三十六は封筒を手に風のように去った。

腰の軽さはいつもどおり。

呆然と見送って、すごいしょっぱい顔をして愛に向き直る、ナナ。

「盗らない、盗らない」

両手を振って否定した。

もしフリーだったらわからないけど、

私には、あなたの代わりは、到底演じきれない。

「……それはわかってんねんけどー、なんかウチの知らんあの人の領域が増えていくのが寂しいー」

「その方がいいじゃん。意外な面増えて」

「おはなはいつも前向きやなあ。あんたがそんなに恋にフリーダムやとは想像できんかった」

「私だつて匠が浮気したら殺すよ」

「殺されるんだ」

「うん。」

けどそれ以外だつたらどんどん私の知らないこと見たり知ったりやったりして欲しい」

「そおなんや」

「だつてそれ教えてもらつたら、自分の領域広がるじゃん」

「はー。……ウチはなんでも一緒にやりたいなあ……」

「それは不公平じゃない、ナナ」

流乃、ちよつかいのお詫びに三十六の肩を持つ。

「あなたピッチで華やかなスポットライト浴びてさ、何千のサポーターの歓声浴びてさ、男の子も女の子も『ナナー！』って名前絶叫してさ、代表行つて海外遠征してさ、それずつとカラ、ジツと見守つてんだよ？ カラにもそういうところ、あつていーじゃん」

「むー……」

そんなこと、考えたことも無かった。

いや、いつも見守つてくれてるとは思ってたけど、「不公平」だなんて。

「カラがナナ見てるほど、ナナはカラを見てない気もするよ」

「そんな……」

ことはない、と言いつれもない自分が居る。

美緒母ちゃんが取りなす。

「まあまあまあ。その分ナナは一緒にいる時愛情爆発だから。ね？」

「そ、そうやあ。120%やでいつも〜〜。」

カラちゃんもな、いつもあま〜い言葉ウチにかけてくれんねんで〜〜」

「ほう例えぼどんな」

「……。」

「……ちよつとここでは言えん」

はなこの問いにマジで頬を赤らめた。

本当に言えないらしい。

「なんといつでも脚本家ですからね。すごいセリフが」

「聞いてみたいな」

「いやいや、いやいや、いやいや。いやいや？ いやいやー！」

腕組んで首振るんだけど、顔がすごい赤い。

思い出し照れしてるらしい。

「サワリだけでも。ねね、サワリだけでも」

「んんんんんんんんんんサワリだけ？」

んんんんんん

『……奈良の大仏さんみたいやあ……』

とか。

うび~~~~~!

ぱずかち~~~~~!!

「「……」」

それは？

「……それ……甘い……かな……どんなシチュウかわかんないから断言できないけど……」

「だって仏契り・日本一ってことやで!?

こんな甘い誉め言葉無いやろ!?

「「あー……」」

都合良く、とりすぎ。

ああ二人の間には確かに愛がある。

「……いや、うん、ジェラジェラしたウチが悪かった。うん。

カラちゃんは、さとはは、ウチのもんです!!

ウチも、カラちゃんのもんです!!」

「出た大宣言」

「力強いな」

「羨ましいよ」

「ふふふふふ」

愛、自分の手紙が巻き起こした騒動が収まって、安心。

そつと渡してもよかつたんだけど、それを誰かに見られたら。

微妙な関係って、難しい。

微妙な？

あと、それと、この場でわざわざ、つていうのは、アピールの意味もある。

……そのアピール先、上町大地は、一部始終を黙って聞いてて、ちよつとばかり驚いていた。あの手紙、古都に見せるつてことはミラクルズ関係。

愛の美しすぎる横顔を見た。

彼女が積極的にチームのことで何か動いたのつて、初めてでは？

おもしろい。

彼女はここ数日で急速に存在感を増した。それは、きつとピッチにも、現れてくるはず。

ちよつと、頭の隅に、置いておくか。

不意に彼女が振り向いた。

にこつ。

と笑うと、

どきつ。

とする。この僕でも。

その笑顔さえ、以前よりも破壊力がある気がする。

「男子三日会わざれば刮目して見よ」と言うが、女子もそうかもしれない。目配りは欠かしてないつもりだったが、まだまだ、甘い。

『……監督つてのは、大変だ』

他人事のように思った。

ああそうか、「監督」って、「見ること」じゃないか。

僕いつも「コーチ」って呼ばれてるから、教えることばかり……

監督と言えば、カラは最近めっちゃめっちゃイキイキしている。

ひよつとすると僕もピッチサイドでは、あんな感じに見えるのだろうか。

だとしたら、いいんだけど。

周りの者が聞けば「今さら何を」と言うに違いないようなことを、一七人の個性派劇団を率いる舞台監督は、ボンヤリと考えていた。

「……ちよつとこつとんこつとん、これ、これ」

「はい？ どうしたんです空堀先輩？」

「これ見て、これ」

「？」

「……ぶつ……ぶつ……ぶつ……」

「ここは笑てええとこやぞ。俺しかおらん」

「ばはははははははつ。こ、これなんですこれ!？」

空堀先輩が見せてくれた便せんには、小学生の女の子が描きそうな、イラスト。かなり、その、正直、ヘタ。そしてところどころに、線が引つ張つてあつて、注

意書きがある。

「見てのとおりや。『アポロ11号改造計画』やんけ」

「たはははは、こ、これ、アリなんです？」

「詳しいルールは俺も知らんがたぶんアリやろ。色はあかんかったと思うけど」

「いえ、ルール上じゃなくて……ん……ん……」

「でもオモロイやろ？ オモロイやろ？」

「う……ん、なんか笑ってしまいそうです……」

「笑いが起きたら笑いが起きたでめっけもんやで……」

「ウチのチームはコントチームじゃないんですから」

「ま、あんまり派手にはせんようには業者さんには言うから。到着したらみんなにバレ無いように気をつけて」

「はい。わかりました！」

……ふふ、愛先輩って時々突拍子もないこと言い出されますね」

「大女優やから。ちよつと変わってんねんで」

「あつ、そういえば学園祭の劇にも出られるんですって？」

「お、情報早いな、さすがこつとん」

「ええ。演劇部に友達いるんです。堺先輩がすごい演技力で度肝抜かれた、って。

あ！ そうそう、空堀先輩ステキ！って目輝かせてましたよう」

「マジで!? マジで!? どの子どの子」

「あつ、それは本人の許可を得てからでない」と

「えー、えー、ええやん教えてーなー」

「でも演劇部の部長さん？ もなんだか空堀先輩超ラブって。到底私じゃ部長さんには敵わないから、とか言っちゃましたけど。」

ふふふ、ナナ先輩に言いつけちゃおうっかなー」

「フッフッフ、こつとんデイトールは甘いな。」

ナナ先輩はその場に居てすでにいろいろ疑われてここにほれたんこぶを……」

「わ。修羅場済みだったのですか」

「……もうな、最近ちよつと大地や太陽の気持ちが変わるようになってきた。

モテてええことなんかひとつもないぞ」

「すつごくカッコイイ台詞です、先輩」

「うん、俺も今言いながらめっちゃめっちゃカッコエエなと思った。

それはええねんけど、いやもう、僕にはナナが居ますから」

「ラブラブごちそうさまです」

「ということでその彼女にはとりあえずダメだとお伝え願いたい！」

「とりあえず、なんですか。」

「じゃちなみにバラしちゃいますけどD組の樋口さんです」

「えっ!? 樋口さんってあの、スラッとしたショートの子やろ!? めっちゃ美人

やん!

ちよつ、ちよつと待つ」

「もおお、チクつちやいますよお！」

「ウソウソ。冗談冗談。ほな僕は発注掛けてきます」

「はい！ ご苦労様です！」

すーつと早足に消えていく背中を見ながら、古都は思った。

2年の先輩方って、「変」なのよね……

一人一人見てると、「ちよつと変かな？」ぐらいなんだけど、集まると、まさに「変と変を集めてもつと変にしましょ」ということわざ通り、どんどん変になる。

……さっきの、やりたいつて言った愛先輩も変だけど、やろうとする空堀先輩も変だ。結局、すぐく変なことが起きる。

こないだの「ザ・ミラクルズ・写真集」だって、1年や3年が制服・私服・ユ

ニフォームで可愛い綺麗なのカッコイイの、普通の写真集に仕上がってたのに、2年生だけ、なんかコスプレなの。ウエイトレスにヘビメタにビキニにウエディングドレスにパジャマに新婚さんいらつしやい。

意味わかんない。統一性も全然無いし。全員メイド服とかならまだわからなくもないけど。

……まあでも、つまりその大ボスも2年生であり、つまりウチのチームは……

『……変、つてことかな』

『楽しそうなチームだよね！ 私も運動神経あつたら入りたいなー』

樋口さんがそんなことを言ったのを、思い出した。

楽しけりやいいつてもんでもないけど……
楽しくないよりは、いつか。

『……ふふつ。出番、あるといいですね、愛先輩』

それは、楽しみだ。

■ 8 出待ちの楽屋

「……あれ、愛先輩、おニューの白スパイクですか！ いいですね！ 似合ってます！」

「ふふ。ありがとう」

——クイーンズカップ・地区予選当日。

試合前練習。

愛のスラリと長い足に、純白のスパイクが映えた。まるでソックスのまま芝生の上に遊ぶような。白なんて目立つ色、相当巧い選手でないと似合わないが、愛さんなら話は別だ。

可憐はふと、愛とパス交換をしながら気づいた。

『……コート、脱がないんだ』

膝下まで覆う長いグラウンドコートを着込んだまま。別にそうしちゃいけないってことはないけど、なんとなくいつもの愛先輩らしくない。

いつもは「(試合に)出せ〜!」と言わんばかりに必要以上に身体を動かすのに。

『風邪でも引いてるのかなあ……』

の、割には、余裕の笑みを浮かべてるような気もする。

フイ~~~~~イイツ!

大地の指笛が鳴った。

スタメンがコーチの元で輪を作る。

「……じゃ、頑張つて」

「はい!!」

「疲れたら、すぐ替わるから」

「あははっ！ 死んでから疲れます!!」

「ん。その意気」

不敵に笑う。

そんな盛り上げ台詞も、愛先輩からは初めて聞いた気がする。

『なあんか気になるなあ……』

……あ、いかんいかん。試合集中、試合集中』

替わるならともかく、替えられるのは、絶対嫌。

可憐、頬を三発叩いて、コーチの元へ駆け寄った。

…

「……あ、やつと捉まった、カラちゃんカラちゃん」

「あ、タカちゃん、今日もバッチリ盛り上げよろしく!!」

本日もスタジアムアナウンサーを務める放送部の暴走小僧、高安和輝が三十六を見つけて勢い込んで訊く。

「まかせてよも〜！ で、今日のポイントは!?」

「うちと似てるチームや。攻撃的で、チームワークがよくて、指揮官が若い」

「お、そうなんだ!?」

「元Jリーガーでまだ四十前やったかな、現役引退後欧州でコーチ修行して、出身チームのサテライトの監督の要請断って、真つさらなチームを指導したいと来たというのが表向き!」

「カネ!? 金かな!」

「それも絶対ある! 青心(せいしん)学園といえば新興の進学校や。スポーツでも名前売ってこ、ってハラやる。サッカー、男子なら大変やけど女子ならまだだいぶ甘い」

高安が大地ではなく三十六に見所を訊くのはこういうところ。大地なら絶対、

優等生発言しかない。

「写真売って活動資金稼いでる貧乏チームとしては負けるわけにはいかんねえ。

燃えるくくく」

「ま貧乏でも無いんやけどな」

高安は典型的な判官鼻眞体質で、それは実況アナウンサー向きだと思うのだが、逆境にある方に味方する。

「ただ個人能力で見ればうちの優位は揺るがん。問題はそこが選手に油断というか、変な余裕を与えてしまわんかどうかや！ 上町大地の手綱さばきが見物です！」

「了解！ 相手はもうドンドン行けって感じやね！」

「前年地区代表、此花可憐や難波鳴海の居るチームを破りやあ大金星やからね！
失うものは何もない、向こうはジャイアント・キリング、狙ってますよ〜」

〜！」

「カ〜〜〜〜ツ、盛り上がってきた〜〜〜〜!!!

あと、注目選手は!!」

「うちで言うとは……ずばり、

堺愛!!」

願望もコミで、プッシュしておく。

「おっ！ プリンセス先発!？」

「いや、ベンチやけど、練習から動きいいです。状況を変えるために大ちゃんが
使うかもしれません!」

「スーパー・サブだね！ わかった、プリンセス用のいいフレーズ考えておく!!」

「オウケイ頼みますよ口から生まれたしゃべってないとしんじやう星人!!」
「しゃべってないと・しんじやうくくくくく!!」

テンションを上げながら放送ブースへ走っていった。

両軍に公平なスタジアムアナを装って、話が進んでくるとミラクルズ鼻眞丸出しでホーム状態に持つていく、その燃える口車は天下第一品。

『……ああやつぱ頼りになるなあタカちゃんわ。ずっと使えたらええんやけど…』

国立競技場の決勝戦まで。

『……いやいや、先のことはいいです。まず一勝！』

空堀、今日はベンチ脇にこつそり控える予定。

関係者パスを見せてピッチサイドへ出た。

パーパーッとピッチの緑が目飛び込み、そこにこちらはピンク、向こうは青の花が咲いている。いつ見ても、いいもんだ。その中に一人、白いグラウンドコートのままボールと遊ぶプリンセス。

『……うんうん、今すでに目だってますよ……きひひ』

思い出し笑いを堪えた。

「仕込み」の出番が、あるといいのだが。

——さあ、決戦だ。

本日のお相手は同じ高校生、違うのはこちらがクラブチーム、向こうは部活。空堀の言うように、ツルの太い眼鏡が印象的な、若い指揮官が指示を出す。

オウオ・オーオオ・ミラツクルツズ！

オウオ・オーオオ・ミラツクルツズ！

サポーターはこちらが遥かに優勢。勝利を重ねるにつれ声援もこなれてきた。

今はチャントに5歳の女の子が唱和する。ピンクの何かを身につける人も増えた。

へい！　へい！　へいへいへい！

へい！　へい！　へいへいへい！

まるで勝利を確信してるかのような陽気な声援に、しかし指揮官上町大地は危惧している。

『……勝てると思われてる試合ほどやりにくいものはない……』

そういう雰囲気は選手達にも伝染する。

1点で試合が決まるサッカーでは、相当な実力差があっても、「絶対」という言葉はない。

相手指揮官は試合直前まで選手達に細かい指示を出している。熱心な監督だ。

選手達も真剣に耳を傾ける。

真つ白な選手達が、教科書通りに戦う。

それはそれで、強敵だ。

こちら、スタメンはいつもの通り。

G K、守口忍。D F右から、西九条明日葉、天満蘭、梅田もも、和泉流乃。M Fダイヤモンド型、底に長居美緒・キャプテン、右高めに難波鳴海、左低めに平野エレナ、トップ下に天王寺ありす。F Wは最前線に森之宮胡桃が張って、その左脇に此花可憐。

通称ダブルダイヤモンド4―4―2。ミラクルズ基本フォーメーションである。胡桃というアンカーを最前線にドスンと打ち込むことで、その周りで可憐・ありす・ナナの攻撃力を発揮させる。

対する敵陣は〇〇年代欧州標準の4―2―3―1。

両サイドに二人ずつの選手を置いて、サイドから決る攻撃を得意とする。ミラクルズはサイド専任は両サイドバック一人ずつなので、数的不利が発生する。ただしその分、中央は厚い。その駆け引きがポイントである。

——ピーツ。

笛が鳴る。試合開始。

案の定立ち上がりから敵選手の激しいプレス。ミラクルズの選手がボールを持つや、二人、三人で囲む網。もぎ取るように奪うと、必ずサイドに展開して持ち上がる。

4―2―3―1の「2」の一人が10番。その背番号通り、この中ではおそらく一番巧い。視野も広い。彼女を経由してボールが散らされる。サイドへ、サイ

ドへ。流乃と明日葉がそれぞれ守備に奔走する。

——一〇分経過。立ち上がりの猛攻はしのいだが、相手のシンプルなやり方に変化はない。

『……早めに手を打つ、か』

自らのストロングポイントを追求するタイプの大地には珍しいことだが、すぐに手当をする。

「ありす!!」

テクニカルエリアから怒鳴って、左に散れとゼスチャー。うなづくありす。

中盤ボックス型あるいはフラット型の4-4-2。両サイドには二人ずつ。左は流乃とありす、右は明日葉とナナ。これで数的不利は防げる。

——しかし一進一退。

相手のプレスが強くて早い。しかも待ち構えるのではなく、DFも含めて全体的に前への意識が高いので、ミラクルズもボールを奪われると、守備に集中しなければならぬ。まさに「攻撃は最大の防御なり」の言葉通り。

サイドにボールが散ると、両軍の四人がわらわらとそのボールを追ってグデグデと争い合い、その時間に両軍の態勢が整って、もう一度最初からやり直し。

そんな時間が、長く続いた。

「『……さあなかなかいい試合になってきました、個の力では上回るミラクルズ、しかし青心学園の速い出足に思うように攻めることができません！ 慎重に、慎重に、慎重に、慎重に、慎重に、慎重に』」

重にボールを回します！　しかし壁は厚い！』」

『……いかなー……』

放送で高安に指摘されるまでもない。戦力差があるのはピッチ上の選手達が一番よくわかってることで、だからむしろ変な余裕が生まれて、じっくり構えすぎている。

サッカーでは、リスクを背負わないとチャンスは生まれない。

しくじったか。ありすを開かせて相手に合わせるのが早すぎた。

しかしここでDD（ダブルダイヤモンド）に戻すのは、自らの非を認めるのはいいとしても、選手の士気を落とす。

大地、すでに選手交代を考える。

が、危険な状態に陥ってるわけでもなく、点が入らなさそうでもない。動きに

くい。

「立候補!!」

「あ、私も」

ベンチ、はなこの叫びにユミ姉が同調した。

こういう気合いの乗らない時には、鬼軍曹タイプが吼えまくってケツを叩いてテンションを上げるのがいい。

「……まだ早い」

この二人のどちらかを突っ込むとするならエレーナと交代だ。エレは地味だがとにかく運動量が豊富で、チーム全体の走行距離を下支えしてくれている。前半

途中でそれを失うのは後でボディブローのように効く。

「……ちえ。」

「……1点喰らわないかな」

「ちよつとハナ、エンギでもないヨ！」

「それ以上点入れればいーじゃない？」

「そんなときはアタシの出番だネ！」

はなこの大胆すぎる指摘に、マキが笑った。

「向こうのキーパーがいいんツスよねえ。もう枠内2本止めてますから！」

「そうね、タイミング余裕はあつたけど可憐とありすのちゃんと狙つたシュートちゃんと弾いてる。いいキーパーね」

「当たってるキーパーからは点獲りにくいからなあ……」

千里にも経験がある。燃え上がってる時は、どんなシュートが来てもゴールを割らせる気がしない。

……ま、そんな状態は滅多に来ないんだけど。

おそらくあの10番と同じぐらいか、ヘタをすれば上のいい人材をキーパーに育てたのだろう。真つさらのチームだからできる芸だ。

——わーわーっ……

前半三六分。サポーターが沸いた。

ゴールラインまでドリブルで攻め込んだナナが、相手選手に当てて出した。

「『さあミラクルズ、コーナーキック。蹴るのはもちろん難波鳴海!』」

自分で取ったCKを、慎重にセットする。

ゴール前激しく鏝迫り合う両軍の選手達。

フト見ると、蘭がちよつと遠目からものすごい勢いで足踏みをしている。

『……OKわかった』

目で返事して、胡桃に合図。胡桃、それを見て大きくムーブ。ニアポスト側へマークのDFを引っ張り出す。

その瞬間、蹴る。

ファーストターゲットの胡桃がニアへ突っ込むのは、真ん中にスペースを空ける合図。可憐はニアポストのさらに先へダッシュ、ももとエレーナは外向きに

上空2mあたりのボールが真つ直ぐ飛んでくるといふ普段あり得ない事態にさ
しものGKも反応できない。

1点。

ワーーーーーッ!!

「『ゴ~~~~ル! ゴルゴルゴルゴ~~~~ル!」

決めたのは! 天満~~~~ッ」

「『ラーーーーン!!」

絶叫の塊に、チームメイトに頭殴られながら蘭が手を振って応える。
もうゴリゴリもゴリゴリだが、点は点だ。

でも客席には……ベンチもそうだが、喜びよりも安堵感。やつと入った、という。

『……だからそれが駄目なんだって』

おそらくスタジアム中でたった一人だけ、大地だけが苦虫を囓みつぶす。

これでますます、さつきみたいな流れだ。

案の定相手チームは、強敵に先制点を入れられたにも関わらず、不要に落ち込まずしつかりした足取りでポジションに戻る。

『……今度からセットプレーは得点に考えないという癖でもつけるか』

無茶なことを思う。今のサッカーでは得点の六割がセットプレーからだ。セツ

トから点を獲れることは悪いことどころか強力な武器である。

ただ、べらぼうに巧い選手の正確すぎるキックに、マークしてなかったパワーヒッターが突っ込んできて撃たれた。言わばどうしようもない点で、そういう点は、状況にもよるが精神的なダメージが小さい。

しかし親の心子知らず。

1点獲つて若干余裕のできたミラクルズは、易きに流れる。

すなわち、ナナかありすに単独で突破させて、決して、CKもしくはFK（フリーキック）を獲つて……

前半もうロスタイム。

「あ、また！」

「よしチャンス!!」

右サイド奥でナナがFKを獲った。

先ほどとはリズムを替えて素早くセット、さーつと人影が寄っていく。ありす。ショートパス。ありすの細い右足がしなる。中央へ。ふわつとした弾道ながらもスピードはある、ありす独特のクロスが、密集に降る。

……先ほどが2年生ホットラインなら、今度は1年生。

ありすに出た時点でグツとラインを押し上げた敵DF陣の間隙を縫って、ありすの弾道をよく知るエレーナが、ぽーんと美しく跳んだ。

さすが元フィギュアスケーター、助走から前に身体を半回転捻りながら飛び出すと、まさにさながら氷上のジャンプのよう。

その金髪に、びたり合う。

そのまま上体を倒すと、そうイナバウアーのように、柔らかなエレの髪にスラされたボールが、その方向のゴール・サイドネットへ飛んでいく。キーパー、咄

嗟に逆のサイドネットを意識して反応して、一歩、逆。

……ぽすつ。

ワーーーーーーッ……

「『ハウ・ワンダフォー！　ハウ・ビューリフォー！！

得点者……ひらの~~~~~~~~ッ！』」

「『エレーーーーーナア！！』」

自分でも巧く行きすぎた得点に、エレがみなに抱きかかえられながら、顔を真っ赤にして両手を振って応えた。感激屋の彼女、涙目になっている。

「美し～～～～～～い!!

やりやがったなエレの野郎～～～～!!!」

千里の絶叫。古都も思わずメモ・ボードを取り落として拍手する。

エレを代えずに正解だった。

時間帯もいい。前半1点ならまだまだ、と思っていた時間帯に、突き放した。

敵が大物の場合、前半は耐えて疲れて足が止まり間延びする後半勝負に行くのがスタンダードだ。

相手のプランは、砕いたといつていい。

『……………これでどうだ?』

……

……………いや、わからん』

大地無いことにこつそり敵ベンチを横目で見て、気を入れ直す。

敵将はそう落ち込んでも居ない。強敵相手に2失点は落胆していいはずだが、これでもまだ「やれることはある」という自信があるようだ。

ピーーーーーッ……

前半終了の笛が鳴った。なるほど、相手選手の目はまだ、死んでない。むしろ安心感でぼやんとした顔ばかりが帰ってくる、こちらの方がガツクリくる。

怒鳴りつけるか。

いや……2点リードは現実だし、それもな……

悪い戦いをしてるわけではない。ただ、テンションが上がらないだけ。

芝居の通じる連中ではない。

『……もう少し、様子見るか』

粘っこい空気を振り払うかのように、頭を振った。

引き上げる主戦と入れ替わりに、サブのメンバーがピッチに飛び出していく。身体を動かして気持ちと体温を上げていく。

一人、残っている。

ポケットに手を入れたまま足を前に投げ出して、立てたコートの際に口元まで突っ込んで、ジッ、とピッチを睨んでいる。愛だ。いつにないその姿に、思わず目を止めた。

目が合う。

眉をひそめて怖い顔。いつになく。

『……わかってるわかってる。あんまりよくないのはわかってる』

誰にともなく釈明する。

でも、そういう冷静な目がもうひとつあるのが、ちょつぴり嬉しかった。

得点は、結果でしかない。

結果は最後に喜んだり悲しんだりすればいいことで、行動の最中では、ほとんど何の意味もない。うまく行動できてない。今の現実は、それだ。

やっぱ怒鳴るか。

いやしかし、2点獲って相手しっかり抑えて怒られちゃ、やってられんだろうし……

セラピスト、悩む。

悩んだ顔を見せてはいけないと思うから余計、悩む。

「……愛、アツプは？」

「もう準備万端」

目も向けず微動だにせずそう言った。いつに、ない。

「いいね……」

今日どこが悪いと思う？」

軽く訊いてみた。

意外な答えが、返ってくる。

「言わない」

相変わらず目も向けぬまま。付け足す。

「……出してくれたら、ピッチで答える」

……へえ。

そう言われちゃあ、興味持ちちゃうね。

らしくない新手のアピールに、大地はちよつと目を丸めた。
なんとなく、ローだった気持ちが昂揚する。

「……答えてくれなくていいように、考えるよ」
「……」

挑発にも無言だった。

よほど確信があるらしい。

そうこられると、すごく気になる。

大地、後ろ髪引かれる思いでピッチを後にした。

やっぱり怒鳴るのは止めよう。この調子であとたった四五分。そういう考え方だっただけだ。勝てばいいんだ、勝てば。

愛は心の中で舌を出す。

演じる、つて、こんなに楽しいものだなんて。

あの何でも知ってるミラクル・コーチがしかも試合中に、たかだか私の言葉に反発するなんて。

なにもわかってないに決まってるじゃない。

笑いを堪えるのに、忙しかった。

『……あ、でもひとつ言えるのは……』

思い切りは、足りない。

それは確実だった。演技だってそう、わずかでも「自分」が居ては、ろくな演技はできやしない。みんな、試合に入り込んで自分の役になりきるという基本が、できてない。

それだけだと思う。

そしてそれなら……

さつき言い放ったように、やってみせることは、できる。
そうあの日、ねこちゃんのキモチを掻き乱したように。

『……1点喰らわないかな』

はなこのように縁起でもないことを、思った。
自分の演技のために。

ふと、気配を感じて目を横に。

あ。もう一人の監督。

聞いてましたか。

彼は、にっただあ、と笑う。

ああ、バレてる。

さすがだ。

あ、いや、あたりまえか。

微笑み返すのも気恥ずかしかったので、ますますコートの際に、顔を埋めた。

ミラクルズ・フォーメーション（クイーンズカップ・地方予選第5戦）

4-4-2 Double Diamond



Reserve
GK20千里 DF2はなこ MF16由美子 MF19マキ FW11愛

註:MF/DFの上につく白い△は攻撃参加の頻繁な選手。

4-1-3-2 Lovely Machinegun



Reserve
GK20千里 MF16由美子 MF19マキ

OUT

MF8エレーナ FW14胡桃



■ 9 主演女優

——後半開始。

一斉に出足よくボールを襲うミラクルズ。

大地の指示は「とにかくプレスは強めろ」だった。変な意識はいいから、守備するところでは絶対相手に負けるな。獲ってからにはゆっくりでもいいが、獲るまではタイトに行け。

気持ちの弛みだけは締める指示。

選手達も自分たちのモヤモヤへの具体的な処方箋だと感じ、それを忠実に実行する。

——むしろそれが、良くなかった。

タイト・プレスの掛け合いなら上等だ、と敵陣が活気づく。スペースと時間が無くなれば、ミラクルズの個人技も逆に封じられる。あとはスタミナ勝負だが、後半始めならまだ、走れる。

むしろ両サイド奥、流乃と明日葉の後ろに大きなスペースができ、そこへ相手両サイドハーフが走り込めるようになってしまった。

明日葉はともかく、流乃は守備専念ではまったく活きない攻撃型の選手である。徐々にそれが相手にもバレてきてて、こちらの左相手の右を、ぐりぐりと抉ってくる。

『……代えるか。いやあ……』

流乃はプライドがアホみたいに高い女で、明確なミスもないのに代えるとあつがすんごいめんどうくさい。というより、流乃が悪いのではなくて、こうなつてる状況が悪いのだ。

「『……あつ！ 青心いいスライディングでボールを奪う!!』」

『あつ、いかん』

余計なことを考えたのは自分だった。

「『チャンスです!!』」

DFが奪ったボールを10番へ。10番、ワンタッチで流乃の裏へロングパス。

最高速で駆け上がる相手サイド HALF。流乃、慌ててその背中を追う。

ここでポイントは、挟りきるまで走つてしまうと間違いなく流乃の超速に追いつかれてしまうことで……

ぽい、と流乃の背中にあるスペースへ、「置く」ように出した。

そこへ飛び出すのが、例の 10 番。

パス・アンド・ゴー、基本中の基本だ。

ももがカバーに走る。だが時間十分余裕十分、追っ手から逃げるように斜めに走る彼女は、良く狙つて、ももを引きつけたことでできた、こちら CB 二人、もと蘭との間のスペースに、ゆつたりとパスを出す。

そこに、相手の、エースストライカー。

完全なお膳立てに、奮い立たない FW は居ない。

ペナルティエリアまで侵入して、力一杯右足を振り抜いた。

……さすがにそこから全力シュートでは、忍と言えども、防ぎきれない。

指先かすめて、サイドネットに突き刺さる。

わあああああああああああああああつ!!

「『ナイツシューーーーッ!!

ミラクルズ守備陣を崩しきつた、完璧な得点です!!』」

放送に指摘されるまでもない。お客さんはそれをよくわかっている。こちらの得点よりずっと大きな歓声が、耳に痛い。

しかもどこかでミスがあったり相手のスーパープレイが出たわけでもなくて、基本に忠実に丁寧なプレーした結果だ、というのがまた、痛い。

これで敵陣は「やれる」と勢いづく。

10番が両手拳を何度も握る。得点した9番がその長身を跳ね両手を回して、

全身でサポーターを煽る。さつきまで眠っていた相手サポーター席が、目を醒ます。

……目を醒ましたのは、もう一人。

『……状況に応じて戦うなんて、いつから僕達はそんな偉いチームになったんだ』

上町大地。

『可憐やナナが居るっていつても、あとはド素人の集団じゃないか。相手となにも変わらない』

自分自身を、追い詰めていく。

『……ボールを、無心で、追わなきゃ、ならない』

サッカーでは2点差が一番危ない。リードした方が油断から1点返され、その勢いのまま同点にされ、そのままひっくり返される。大舞台でも何度も起きた、魔の得点差。

それを、断ち切らねばならない。

「……愛!!」

愛？

なんだ、僕はそれが欲しいのか。

自分で怒鳴ってビックリした。まさかそんな名が出るなんて。しかし言い直すのは「空気」を壊す。すぐに保険を掛ける。

「はなこ！」

4—1—3—2でDF前アンカー！」

「オツケーイ!!」

つて、あんまやったことない形ね」

「システムはどうでもいいんだ。要は腰が引けてる美緒とナナのケツ叩いてこ
い」

「あ、なるほど了解、思いツキり使い倒すわ！」

「……それから愛」

「はい」

立ち上がる。監督の演出指示に、耳を傾ける。

「とにかく狂ったようにボール追え。それだけでいい。大事に行きすぎてるんだ。基本の基本を、ピッチのみんなに思い出させてやってくれ」

「はい」

「ガンガンシュートも撃て。入らなくてもいい、枠に飛ばなくていい、ボールを
持つてシュートする、それがサッカーだと、教えてやってくれ」

「はい」

お墨付きまでもらった。

よし。

グラウンドコートをバツ、と脱ぐと、ピッチサイドへ、駆けだした。

……ん!?

そこでベンチが、プチフリーズ。

あれ？

なんか、おかしくない？

どこがどう、つてわけじゃないんだけど、愛ちゃんのユニが変だ。

なんか微妙に、ヒラヒラしてる気がする。

あとの丈が、短くない？

普通サッカーユニは上はたつぷり長くて、ズボンに入れて……なんか裾がね、

足りないような気がする。

あ、なによりなにより、襟がおかしい。

立ててる。

往年の名選手エリック・カントナのように、まあ、立てるのはいいし意外に似合ってるんだけど、ウチのユニツってあんなにカッコよく襟立ったつけ？

マキ、自分の襟を立ててみる。

……ふによ。

だよねえ。なんであんなピンピンなの？

一人だけ純白のスパイクもスラリと長い脚に見目麗しく、ああ、っていうか、パンツ小さくない!? なんかむかしのサッカー名場面集見てるみたいな、ぴちちとした感じが……

これがまたプリンセスが着るとえらく似合う、というか、美しい。脚からおしりにかけての曲線がクツキリ浮き出て、なんか化粧品のコマーシャルみたい。

美原はなこはファッションオタク。一目見てわからぬはずもない。

交代待ち自分もピッチサイドに駆け寄って、笑いを噛み殺しながら、訊いた。

「……こないだラブレター、これ？」

「うん」

「似合ってるわよ」

「ありがとう」

「愛の見立て？」

「うん。でもカッコよくしあげてくれたのは、さとるくん」

「カッコよ……うーん……ま、目立って」

「うん」

「プレーでも」

「うん。はなもね」

「もちろんさ」

これがアリなら、私も今度伊達眼鏡でも掛けてプレーするか。

いやいや、それはユミ姉とキャラ被るな……

あ、だめだめ、んなこと考えてる場合じゃない。

——交代の札が上がった。胡桃とエレーナに替わって、二人が飛び出していく。その瞬間から、サポの目、釘付け。

『……なんかおかしくない!? プリンセスのカッコ!』

『あれっ? あれー!』

『でも悪くない!』

『うんうん、パンツ綺麗!』

『おおっ!? 跳ぶとちよつとおへそ見えてませんかあれ!?!』

『んなわけねーだろ、アンダーシャツ着てねーわけ……んっ!? 肌色が!?!』

『女子プロゴルフアーのような……ああつ、スライディングでパンツが、パンツが食い込……』

『ちよつと! なに目血走らせてるの!!』

特に男性。もう試合どうでもいいという感じ。

さながらピッチは、愛の劇場。

指揮官大地、頭、抱える。

『……』『目立て』って言ったのは、そういう意味じゃな……い!』

……しかし、スタジアムの雰囲気が変わってくる。
ベンチも。

「アイちゃんガンバレーーーーー!!」

「愛先輩!! 右、右のスペース!!」

マキと千里が、怒鳴りまくる。

「愛姉様ーーーーー! 右に開いてーーーーー!」

「消えて外せッ! まともにもぶつかっても駄目ッ!!」

替わったばかりのエレーナと、珍しく胡桃も突っ立って指示を送る。

ど派手で美麗なカツコと裏腹に、泥臭く鈍くさくただひたすらにボールを追う。

そのギャップが、人の目を引く。

アーイーアイ!

アーイーアイ!

アーイーアイ!

アーイーアイ!

ストライカアアアだよおおおお!!

コミカルなチャントが響いた。

持つていかれかけた流れが、止まる。

これだけでも、十分役割を果たしている。

はなこが持ち前のガッツ・スライディングで敵のMFからムリクリボールを剥

ぎ取った。

ここは大変だけど、楽。最終ラインじゃこんなバクチは打てない。思い切つてやれる。ただそれを、延々やらなきゃならないけど。

ぽん、と立ち上がって、三方にターゲット。右にナナ、左にありす、中央に美緒。みんなこっち見てる。

ああ、悩む。どこが今この瞬間可能性が最大なのか。
んなの、わかるわけないじゃん。

美緒はエライわ。ずーつとこれやってんだもんね。

……ということ、美緒。

美緒、ボールを受け取る。今は久々のトップ下、新鮮なり。
さして。

可憐と愛の２トップには相手センターバック二人がマン・ツーでぴったりついている。常道としては、ありすかなナへ一旦出してサイドから抉ってもらおう。

いや。

大地君のお気持ちとしては、要するにガツガツ行け、つてことだもんね。

美緒、ちよつと不機嫌。

ここはここでいいんだけど、いつもの場所を外されたことが。

じゃ、行きましょ？

突き進んだ。ドリブル。ボランチを振り切りセンターバックのど真ん中へ突っ込む。慌てて、右のCBが愛を離して、襲いかかつて、くる。

『……………ハハ！』

スパツ——と切れよく横パスが出る。

フリーになった愛が受ける。角度はないが距離は適正、シュートコース、あり。

ドガアアアアアアアアアアアアン!!

びゅーーーーーーーん……

「ギャ~~~~~ツ……」

愛、ワンタッチでそのまま思いつきりシュート。盛大な宇宙開発、国家予算の無駄遣いに、国民が絶叫した。

「おっけおっけ、ナイスナイス」

美緒、心にもないことを述べながら手を叩いて愛を褒める。

せめてドフリーなんだから粹には飛ばんか。

だが、直後の愛の仕草に、思わずへたり込みそうになる。

「……ん〜……」

『一体何が起こったのだ』とでも言いたげに、つまり『この私にこんなミスなどあり得ない』という表情で、腕を組んで小首を傾げた。

いや、いつも、あなた、こうじゃん。

ナナも思わず袖で顔を隠しながら横を向いた。可憐も震えながら真下を見つめる。あります、もうどうしていいか、わからない。

サポーター達も、古株はみな、笑いを堪えるのが、必死。

彼ら彼女らにはわかつていた。

それが、愛の、戦いであると。

戦ってる相手はつまり、敵陣である。

1点返してさあこれから、という時に相手は11番を切ってきた。レギュラーFWナンバーだ。しかもなんだ、べらぼうな長髪が目立つヤケクソな美少女で、サポーターから選手チャントも沸けば、ベンチから指示も飛びまくる。

あれが、切り札か。

ここまででも才能の違いに辟易してきたのに、崩されなくても身体能力で2点ももぎ取られたのに、まだ居るのか、あんな選手が。

その選手は襟を立てて猛烈にボールを追う。ああ、あれはファイタータイプの

F Wだ、調子に乗せると、ヤバイ。見よ、あの冷静な10番・キャプテンマークがあこの此花可憐ではなく彼女にボールを出したではないか！

……と、そんな感じ。

敵将も焦りからか、テクニカルエリアに出ずっぱりで指示を出しまくる。

『……ああダメダメ、アゲインストの時はいつぱい言わない方がいい。混乱するだけ』

大地他人事のようにそれを見て思った。

なんだ、簡単だな、サッカーは。

いつも不思議に思う。

サッカーは、前向きな時にはすこぶるつきで簡単で、後ろ向きの時には、無茶苦茶に複雑怪奇だ。まさに人生のように。

——愛は、なりきっていた。

「シーズン四〇得点のスーパーストライカー」に。そう思い込もうとすると、だんだん、その気になってきた。

「よこせーーッ!!」

美緒がボールを持てば、怒鳴る。

こんなこと普段ありえない。

「足元でいいよッ!!」

ナナのパスが長いと、両手のひらを揃えて足元を指して怒鳴る。
こんな台詞初めて。
挙げ句の果てには。

「……カレツ!! 私居るからッ!! 一人でやろうと思わないでッ!!」

スーパーエース様に。

ああ、なんか気持ちいい。

……みんな私が怒鳴った後に顔背けて震えてるのが気になるけど……

「カラ元気も元気」という名言がある。

演技でも思い込みでも、なりきつてるうちになんとなく、そんな風になつていく。確か「徒然草」にも出てくる古来からの真理である。

敵のCBが、愛をガツチリ離さないようになった。

となると、こちら攻撃陣4枚に向こうDF4枚がピッタリついて、人が余らない。

美緒はキープ力が高く、ボールが入れば敵ボランチ2枚を背負つてもなんとかなる。

つまり、ここにもう一人突っ込めばその選手はフリーであり……

美緒がガツツリ、敵の10番からボールを奪う。職務に忠実な彼女はすぐ取り返そうと美緒を追う。もう一人のボランチも挟み込んでくる。

これが美緒の罠。十分引きつけて、前にドリブルと見せかけて、

ヒールパス。トゥ・はなこ。

たつぷり時間と前のスペースを稼いでもらったはなこ、ここは見せ場のロングパス。

いつもの美緒を真似て、ほぼ、ノールックでローングパスを左サイドに蹴り出した。

ありすのずっと前、相手サイドバックの後ろ、そして、光の速さで走る流乃の、前。

流乃、狂ったようにストライドを広げて走る。

さっきのはカツコ悪かった、ホントにカツコ悪かった。

なぜあそこでサイドハーフが走るのを見逃したのか、なぜあそこでファウルでもないから止めなかったのか。

慢心・日和見・気まぐれ。

自分の悪いところが全部出てたようで、もおこれは、このあと爆勝してもらわないと、人々の記憶からあれを消し去ってもらわないと、恥ずかしくて街を歩けない。

本気の流乃は、一〇〇mを9秒で走る。

……ように見えるぐらい、速い。

地上の生き物で追いつけるものはない。

……ように思えるぐらい、速い。

はなこのロングに悠々追いついて、クロスを、上げる。

宛先は、今一番目立つ人。

愛は確信して走った。

私に出ると。

なんとたつて私は、シーズン……スーパーストライカーだから!!!

シャツが掴まれる。首が絞まる。前に行けない。でも行く。でも行く。でも行く。でも行く。でも行く。

倒される、引きずり倒される、でも行く。でも行く。でも、行く!!!

脚だけが前に出た。

白い脚が伸び、白いスパイクが伸びた。

そのつま先に、ボールが、触れた。

ベンチへ向かって。いや正確には、その横に蹲ってる監督に向かつて。だって、約束がある。

ふと思い出した。寧々子ちゃんのあの仕草。真似してみよう。

急停止。

どん、と両脚を拡げて立つと、仮想の弓を引き絞る。

彼女の可愛いのは違って、1m2mありそうな大弓を。

ギリリ絞って、撃ち放つ。

ビューーーーーーシューーン!!

……ズバツ!!

三十六、芸達者、それを受けて、
ゴロリ、
転じて、死ぬ。

「『プリン・セス・アローーーーーッ!!

あなたのハートを、狙い撃ち~~~~~~~~ッ!!』」

ワーーーーーーーーッ……

あまりにも似合いすぎるそのゴール・パフォーマン스에、観客狂喜乱舞。
完全に、一人舞台。
全部持っていく。

「あはははは！ あはははは！ あはははははははははは！！」

ベンチでは千里がおサルさんのオモチャのように両手両足を叩いて喜んだ。

「……さ、最高すぎる……」

「すごいデス、すごいデス……」

「……なにが凄いつて」

ユミ姉、ベンチでは冷静、客観的に分析。

「あの触っただけのシュートが、ものすごいスーパーシュートに見えることね」

「いや、スーパーシュートだよ」

大地、喜びを分かち合った後ベンチに戻ってきて、やつと、本日はじめて、笑顔。

「あれだけDFに掴まれながら強引に合わせたんだ。

その、強引さが、伝わるのさ」

「なるほど」

「凄い弾道や無茶な体勢だけがスーパーシユートじゃない。

泥臭くても平凡な当たりでも、チームを勇気づけるのが、スーパーシユートだ

よ」

「そうね。

……くー、ぼやぼやしてらんないんじゃ……」

ユミ、肘で隣の胡桃をつつこうとして、ハッ。

隣から、ものすごい負のオーラが。

「……まけない……」

凄く小さな、しかし地の底から響くような声で、そう呟く。

無理な体勢から強引にボールに触るのは、身体能力の高い胡桃のお家芸である。

自分の芸を奪われたみたいで、穏やかではない。

またあのバカ・コーチが隠そうともせずニツコーと笑ってるのが気に入らない。
そんなに、もう一人、FWが、要りますか。

『……うひー……』

黒いオーラに包まれる胡桃先輩を見ながら、古都は「もうちよつと気を遣えばいいのに」と思いかけて……その気を、遣わないのが、コーチの強さだ、と思った。

『……何も考えないのが、一番強いのかな』

ピッチに目をやる。

ああ、何も考えて無さそうな主演女優が、今も舞台を華やかに駆け回る。それに釣られて、助演女優達も、周りでイキイキと踊る。

そうだね、もう、舞台上に立つたら、真つ白じゃないと。

そこでなにか考えてるようじゃ、準備が足りない。

——華麗なダンスは、まだ続く。

余計なことから解放されれば、ミラクルズは果てしなく強い。敵陣も、せつかの逆襲の流れを断ち切られ逆に突き離され、ガツクリ落ち込む。

ここだ、強いチームとそうでないチームの差は。

点はひよつこり入ってしまうことがある。

入れた方も入れられた方もすぐに忘れて、今できる最善のことを、やり直す他

にない。

原理は簡単なことなのだが、人間の感情はそう簡単にできてなくて……

——ブンツ!!

美緒がボールを持った瞬間、可憐が得意のワープ・ドライブでDF裏へ飛び出す。美緒もちろん、その前方へ速いスルーパス。完全に抜け出した。

この抜け目の無さが歴戦の勇者。敵の心理の一瞬の隙を突く。

ハッキリ破られたのだから高いラインは一旦諦め、じっくり構えるべきだった。たぶん経験豊富なDFリーダーならそうしただろう。あるいは経験豊富な監督ならば、こちらが喜んでる間に、すぐその指示を出しただろう。

その判断一つ、たったそれだけで、トドメを刺されてしまう。

一対一で可憐が外すはずがない。

ナナもありすも、キャプテンでさえ安心しきって、ボールと彼女を見送った。しかし、一人だけ違った。

ひたむきに、そしてひたすらに、走る。

FWの、基本だ。

「2トップ」の、義務だ。

可憐は、長らく味わってなかったそんな感じを、満喫していた。

ああ、2トップって、いいなあ、と。

もちろん普段から2トップなんだけど、胡桃さんとは役割が違いすぎる、こんな時併走することもない。

カバーがいる。だから思い切つてプレーできる。

だからか可憐、いたずらギツネ、2トップの醍醐味を、さらに満喫したくなる。

「……あ、あのバカ」

異変に気づいたのは千里。アイツ、真正面じゃなくて左へ流れてる。というこ
とは……

キーパーもシュートコースを切るため左へ、

可憐も左へ、左へ、左へ……引きつけて、

パス！

するすると絶好のチャンスボールが、もう一人のFWすなわち、愛の足元に、

転がり込んだ。GKは左端に寄ってゴールがら空き、もうただ触れば、1点である。

しかしここからが、すごい。

愛、思い切り、そこまでしなくていい、という勢いで、右足を振り抜く。

駆け込むスピードも乗って、凄まじい勢いでボールが飛ぶ。

勢いが、ありすぎる。

クロスバーに当たって、真下に跳ねる。

地面でバウンドして、高くく上がる。

落ちてくる。

そのボールを、

「『バイセコーーーーーーッ!!』」

オーバーヘッド、キック。

これがまた打点が低いなのなの。

ほとんど背中地面につけて、青空ヨガ教室。

ボールはご丁寧にもう一度地面でぼいん、とバウンドして、ゴールネットへ、飛んだ。

でもおかげで、タイミングズレズレ。

相手GKの両腕が、わたわたと空気を掴んだ。

……ほふっ。

ゴール。

「あはははは、あはははははは、あははははははははははははははは!!」

千里、もう腹筋崩壊。

ベンチの誰もが、胡桃でさえ、爆笑を堪えきれず地面に這いつくばるよう
にして涙を流して笑った。

自作自演にもほどがある。

なんだその一人芝居。

普通に、触れば、いいだけじゃん!!

でもお芝居はまだ続く。

今度はそのままゴール裏に向かった愛、くるりところちらを向き直る。

と、両手を人差し指と親指を立てて、前後に並べた。

「死刑」？ いや世代が違う、あれは……たぶん、マシンガン。

喜びに駆け寄るチームメイトに、乱射する。

「ずだだだだだだだ」

ミラクルズはだいたいがノリがいい。

ナナ、美緒、可憐はもとより、ありすとはなこまでもが、その機関銃に撃ち抜かれて、ゴロゴロと転がった。死屍、累々。

愛、最後に銃を立て銃口を「フツ」と吹いて、目を細め首を反らして天を仰いで、

「……………えくすた・しー」

ギヤーーーーー……………

歓声だか絶叫だかわからないものがスタジアムに木霊する。

「『プリン・セス・マシンガーーーーーイーーーーン!!

あなたの魂、乱れ撃ち~~~~~イイツ!!』

実況に指摘されるまでもない。

確かにその時、スタジアム中の魂は、彼女に釘付けだった。

そう主演女優の、大見得に。

大騒ぎの中、ベンチでは大地、ユミに囁く。

「……ユミ姉、アップ」

「えっ!?　　ここです!」

「ロスタイムで愛に替える」

「愛ちゃんに!?　　どうして!」

「花道」

「ああ……りょーかい!」

怖いぐらい冷静だな、この人は。

ユミはそう思った。

まるで観客が感涙にむせび役者が陶醉してるのを冷徹に見つめる、舞台監督。自分も真似て、冷静になってみた。

「……時間目一杯までハットトリック狙わせる手もあるわよ」

「愛にはそんなものより拍手の方が嬉しい……はず」

「フッフ、そうかな」

それはわからない。自分はFWではないから。
そして、女優でもないから。

——5点目は、可憐が獲った。

エースの意地である。もうボロボロの守備陣をチンチンにして、一人で獲った。
いいところ見せておかないと、あたしだってリストラされる。

もう試合は動かない。ロスタイムに入ったところで、予定通り交代。堺愛に替えて八尾由美子。

交代札が出てコールが行われると、「もつと見たい」という怨嗟の声が巻き起こって、でもそれはすぐに、スタンディング・オベーションに。

大きな拍手の中、プリンセスが静かに舞台を退場する。

ユミ姉と両手を合わせて、ピッチに一礼、そして、くるり。

振り向いて、サポーターの皆さんに、お客さんの皆さんに、ドレスの裾を持ち上げて、ご挨拶。

一際大きな、拍手が沸いた。
そして、選手チャントが。

アーイーアイ!

アーイーアイ!

アーイーアイ!

アーーーーイアイ!

スウパァ・スタァだよおおおおおおおおおお……

■ 10 助演女優

——翌日。学園祭の日。

演劇部の開演時間には、チームみんながそれぞれの持ち場をほつぽり出して駆けつけた。演劇部も、左端ながら最前列から二〇席ばかり、キープしてくれた。無論三十六は舞台袖で指揮を執る。

お客さんは講堂に超大入り満員立ち見もギツシリ、その数、五百か六百か。

今日は愛は、一番助演女優となり、主演の寧々子を助けた。

可憐な愛・シンデレラをいじめ抜きいたぶり尽くす美貌の悪女、寧々子・継母。愛はあくまで純真無垢、人を疑うことを知らない天使のように。

寧々子はもう欲望剥き出し、人を利用しようとしか思わない徹底した利己主義

者。しかしだからこそ、人間臭い。

二人の個性がぶつかり合う。

中盤の山場、シンデレラがガラスの靴の持ち主だとわかる。王子様のプロポーズ。

思いがけぬ幸運と幸福に包まれて、喜びの舞を舞うシンデレラ。ミュージカルのごとく歌を歌いつつ、舞台狭しとくるくる踊る。まるでバレエのようでもあり、エレーナ、昔はこういうのが本職、が手を叩いて喜んだ。

「……芸達者だね、愛ちゃん」

「うん」

美緒の言葉に大地がうなづく。思わず、見入ってしまう。

それは大地だけじゃない、男も女も、シンデレラの美しさとその幸福に、見とれていた。

そこでききなり暗転、ピンスポット。

お花畑が一転、嵐。

寧々子継母、髪を掻き乱し奇声を上げて、

「……………キイエヘエエエエエエ!!

こ……………このままで終わるものですか!!

見て……………見てらっしやいシンデレラ!!

あなたの幸せ、粉々に打ち砕いてみせるわッ!!

王子様は……………王子様は、わたしのものよおおおおおお!!

怪演。こちらはこちらで、目が釘付け。

「…………こ、怖い…………」

「だつ、大丈夫、だよありす、お、お芝居だから」

本気で怯えるありすを、千里がなだめた。といいつつ自分もなんか背筋がぞわぞわする。

舞台つて、すごい。TVやネットじゃありえない肌触りが、空気が、伝わってくる。

寧々子の怪演を和らげるように、仕掛けはコミカルだった。

愛のアイデアどおり童話をモチーフにした。

毒入りりんごを贈る、間違つて義理姉の一人が食べて大騒ぎ。

言葉巧みに柿の種と王室の宝物を交換させる、なんとその柿が珍種で他国に輸

出できるフルーツになりシンデレラは大手柄。

当たると歳を取ってしまう煙が出る魔法の箱を、若返りの箱だと言って贈る、シンデレラはそれを太皇太后様に差し上げる、なんとそれは老人は逆に若返る魔法、美しく若返った太皇太后様に王室は大騒ぎ……

そのたびごとにシンデレラは愛らしく笑い、そのたびに継母は狂おしく身をよじる。

「わあ、なんと素敵なことでしょう！ お継母様のおかげですわ!!」

「キエエエエ!! シ、シンデレラめえええええ!!」

——そんな日々もいつしか終わりを迎える。

王様が王子様に王位を譲り、シンデレラが王妃になることが決まる。

その時、継母は、ベッドの上で病に伏せていた。

もう助からない、不治の病。

継母に内緒で姉二人はシンデレラに助けを求める、シンデレラは陰からできる限りのことをする、しかし、彼女の病は、良くならない。

即位式のその日。

死期を悟った継母寧々子が、ベッドの上で孤独に呟く……

「ああ……私の人生は……なんだったのかしら……

あんな小娘にかかずらわって……

私は、私の幸せを、求めるべき……だったわ……」

そいへ。

「……宅配便です。あ、ここ置いときますねー。どもー！」

「……な……にかしら……」

ああ……この忌まわしき名……

シンデレラ……

私を嗤うつもりね……

王妃となったあなたが、滅び行く私を、嗤うつもりなのね……」

継母、ベッドに半身を起こしゆつくりと包みを解く。

中から出てきたのは……

ガラスの、靴。

「……おおおおおお……」

なんとという意地の悪さだろう。

なんとという嫌味、なんとという皮肉、なんとという悪意だろう……

あの女め、今際の際にこのような忌まわしきものを……

……いまわしき、ものををををををを!!」

叩きつけようとする!

……しかし、思いとどまる。

「……ふ……ふふ。」

ちがうわ、あなた。

これは……シンデレラの名を借りた、王子様からの贈り物。

ええきつとそうに違うわ。

私のことを、王子様が忘れるはずがないもの……」

揺れる身体震える手で、靴を床に揃える。

全身の力を振り絞り、最後の力を振り絞り、彼女はベッドから起き上がる。
片足、片足、
ガラスの靴を履く。
ああ、その靴は、あの日と違って、ぴったり、入る。

「ああ……やっぱり……

愛ね。

これが、愛なのね」

ふら、ふら、と舞台中央に、踊るように彷徨い出る。

暗転、スポット。

浮き出る継母の笑顔。

それはまるで、王妃に憧れる一〇代の、天使のように可愛い娘。

「……行かなきゃ、お城に。

……舞踏会に……」

カラーーーーーリン・コローーーーーリン……
カラーーーーーリン・コローーーーーリン……

即位式を告げる鐘が鳴る。

「ああ、急がなきゃ……

いそが……な……

きゃ……」

……ドサッ。

舞台の中央、命の炎が、消えた。

スポットはその亡骸を映え照らす。

愛に飢え愛に死んだ、孤独な魂の亡骸を。

ワーーーーー……ッ……

万雷の拍手が巻き起こる。

すすり泣く声も聞こえる。

三十六、監督、舞台袖シンデレラを見る。

愛、指で×を出す。

「王子出るな！ スポット落とせ！ 鐘鳴らしっぱなしでゆっくり幕!!」

急遽エンドシーン変更。鍛え抜かれた劇団員達が、それぞれの持ち場で、監督の指示を遂行する。

……幕が閉まった。

まだ、雪崩のような拍手はまるで止まない。

カーテンコールだ。

「……すぐ開けろ！ BGMフェードインでゴー！

シンデレラ!!」

言われるまでもない。愛、舞台中央、寧々子に駆け寄る。

もう一度開き始める幕の中、観客が最初に見たものは、継母を助け起こすシンデレラだった。

もう、三毛寧々子に戻った継母は、号泣しながら、堺愛の両腕に、すがった。愛も、もらい涙を流す。

二人、立てない。立つ必要もない。

他の劇団員が、拍手で二人を取り囲んだ。

観客も総立ちで、二人と、劇団と、舞台を、拍手で、包み込んだ――

「いやあもお、ええ芝居やったあ……」

「ホントだねえ……」

外に出た。晩秋の青空が、湿った目に染みる。

ナナの嘆息に、美緒がハンカチで目頭を押さえてうなずいた。

「……なにあの本格的なの。こんな凄かったつけ演劇部って」

「なにを言うтонねんるー、あれは、ウチの人の脚本・演出のおかげです！」

「さすがカラちゃんだよー！ 凄いよもー！！」

「愛はもちろんだけど、三毛さん超・熱演だったね！」

「僕も最後ちよつとファインダー見えなくなった」

蘭とはなこも興奮気味に大声を出せば、匠も早速液晶画面で撮影チェック。

うん、これは100%いい写真撮れてるに違いない。

「……おう、どないでした皆の衆、お楽しみいただけましたか」

監督だ。舞台袖の小さな出入り口から出てきた。

あんないい芝居の後なのに、平然としてる。

「うん！ もお！ すごいやんかあんた!!」

なにをどうやったらあんなすごい芝居作れるのん!!」

「アホ俺なんもやってないっちゅーねん。ぜーんぶ演劇部の皆さんの力です」

「またまたご謙遜を」

「いやいやキャプテンこれマジで。」

ああ、大地、お前の気分がよーわかった。

寧々子・愛の2トップがおつたら、俺なんーもせんでも勝てるわ」

「はははっ」

「さとる!!」 「監督」

ああ、主演女優二人が。

衣装そのまま、メイクそのまま、場が一気に華やかに。

「ねこ、おつかれさま!! パーフェクトやったで!」

「ん!」

寧々子、ぴよん、と三十六に飛びつくと、頬に、

ちゅっ。

「ぎゃ~~!!」

「え!? え・え・え!?!」

「最高の監督さんに、お礼!!」

可憐な少女が満面の笑みで。

「……あ、じゃ、私も」

愛、逆の頬にそつと唇をよせて、

ちゅつ。

「ぎゃ・ぎゃ~~~~~ツス!!」

「は、はうはうはう」

「いいね、両手に花だね、オスカー監督!!」

「うふふふつ」「ふふふふつ」

「ちよつ、ちよつと待ちいなあんたら!!」

この人は、ウチのもんです!! この人は!!」

「ナナ、いーじゃない今ぐらいせつかく盛り上がってるところなんだから」

「匠、写真写真」

「ああそおだそおだ、難波さん、ちよつと外れて」

「はい~~~~~いい!」

「はいはいナナこつちこつち」

流乃が羽交い締めにしてナナを引き剥がす。

ここぞ、とばかりに花二輪、三十六の両腕に絡みつく。

三十六、もう、昇天寸前。

「……し、しやわせやあ……」

「あんた……」

「さあそれじゃあ、もつかいチューいつてみよつか」

キャプテンはいつも、容赦がない。

「さんせ……」

「あ……」

「……」

ちゅちゅつ。

パシヤーーーーーン!!

め。三十六もう、これ以上だらしのない顔は一生すまい、というトロけた表情で、締

「……ん~~~~~……」

愛ね、

これが、愛なのね」

「ちが~~~~~う!!!」

「私、愛だよ?」

「いやそやなくて~~~~~!!」

「あはははははははははは、あはははははははははは………」

「ふふふふ、ふふふふ………」

その愛は、寧々子と顔を見合わせて、笑った。
よきライバルよき共演者そしてよき友と。

「……おつ、なんでげす修羅場ツスカ！ 三角……いや四角関係か!？」

「チー助え！ おかしなこと言うなあ!」

「ううん。舞台の上では、ひ・と・り・じ・め」

「あら、ダメよシンデレラ。三十六様は私のもの」

「お継母様、こればかりは譲れません」

「あなたには王子様がいるじゃない」

「あれは舞台の上での話です」

「全部舞台の上での話や~~~~~!!」

「ああ……しゃゝわしゃゝ……」

わははははははは……

ミラクルズに演劇部、みんな揃った笑いの輪は、しばらく、収まらなかった。

「ふふふふふふ……」

愛はその真ん中で、今日の青空のように、華やかに清々しく、笑っていた。
その名の気持ちに、心膨らませながら。

私でも、誰かを幸せにできる。

その幸せを、噛みしめながら。

スーパー・サブ？ いえいえそれは違います。

主演女優は最後に登場、美味しいところだけ持つていく。

お客の気持ちと魂だけを持つていく。

ゴールと視線を独り占め、そうよ女優はワガママじゃなきや。

そこどいて邪魔、私の姿が、見えないでしょ？

ああ魂を、震わせるのは熱意だけ。

本気の嘘は、嘘じゃない。

ピンスポ浴びていよいよ出番、

お客の拍手が送り出す、待つてましたと声が飛ぶ、

そうまたの名をプリンセス、

スーパー・スター、堺愛!!

Never Give Up, Go Ahead, and DO MIRACLES!
episode 11 『プリンセス・アクトレス』

【あとがき】

ありがとうございます。ながたかずひさです。

お楽しみいただけましたでしょうか。

前作から堂々の4年ぶりとなりました「ミラクルズ!」、お待ちいただいた皆様には大変長らくお待たせいたしました。初めての方はいかがでしたでしょうか。

最初ビクビクしながら描き始めたのですが、しばらく描いてるとみんな、昔のように動いてくれまして、ホッとしました。

これで9冊目、メンバー表半分以上を埋めた計算になります。完走目指して、がんばります。

普段の愛ちゃんはあまりしゃべらないので、今まで目立たない存在だったと思います。これで少しは色づきましたでしょうか。また、寧々子はもうでした？魅力的なキャラになつてましたでしょうか。

作中、三十六が言つてましたが、「自分をゼロにしてなにかが降りてくる」「自分の個性を極限まで押し出す」の二つは、突き詰めてしまえば同じところだぶつかると思います。二人の女優には、おたがいに刺激し合つていい役者に育つてもらいたいです。

そしてそれは、演劇だけじゃなくて、なんでも。僕もいつも、その二つの間で迷います。

自我を捨てるには生臭すぎ、自我で押すには遠慮しすぎ。

いやあ、どれだけやつても、芸の道は、精進です。

ね、監督、そして主演の二人さん。

webには「ミラクルズ！」の詳しい設定資料などございます。

ぜひ一度、ご覧ください。

<http://rakken.net/>

ご感想、お褒めの言葉お叱りの言葉ございましたら、お気軽にお声おかけください。

nagata@mti.biglobe.ne.jp

最後にもう一度。

お読み頂きまして、まことにありがとうございます！

二〇〇八年一二月　ながたかずひさ



Miracles! Episode 11 [no.9] - Princess Actress -
Powered by Kazuhisa Nagata
web: <http://rakken.net/>
mail: nagata@mti.biglobe.ne.jp
TwitterID: KazuhisaNagata
2008.12